
神様と事務員

ブルテリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と事務員

【Nコード】

N2583Y

【作者名】

ブルテリア

【あらすじ】

神様と大学事務員のほのぼの恋話。8話までの主人公視点は完結済み。相手側視点も16日にて完結しました。

1 神様（前書き）

郷里を離れて数年。寂しくなったので、郷里の風景をモデルとした、なんちゃってファンタジーを書いてみました。

地名・方言等は出しておりませんが、特徴あるモノが作中に書かれていますので、分かる方には分かると思いますが、フィクションであることご了承ください。

1 神様

1週間前から職場がおかしかった。

課長と主任がちらちらこちらを見ているし、先輩達もなんだか腫れ物を触るような感じでいつもと違う奇妙さがあった。

入社して、早半年。ミスもだいたい減らせたと思う。それでも、完璧とまではまだ言えない。戦々恐々と上司達の視線を気にしていたけれど、3日経っても何も言われないままだった。

そして、昨日定時上がりをした私が忘れ物に気づいて職場へ戻ったとき、聞いてしまったのだ。

「ねえ、タマさん、出来ると思う？」

佐々木主任、私に何をさせるつもりですか。

ちなみに、タマさんとは私の職場でのあだ名だ。自分のことを話していると感じいたら入り難くなってしまった。業務終了後でロールカーテンがかかっているの、これ幸いとカウンターに隠れる。

盗み聞きは悪いことだが、自分の身に何かが起きようとしているのを聞き逃せようか。

「どうでしょう。でも、タマさんは結構素直ですし、仕事って言えばちゃんとしてくれると思います。あちらが悪い方でないのは保証されているようなものですし」

鈴村先輩、なんだか微妙ながらも評価をしていたきありがとうございます。でも、その言い方だと何か面倒くさいことが起きそうぞ不安です。

「まあ、明日あたり佐々木君が連れて行ってよ。うまくいくかどうか心配するのはそれからだ」

谷課長まで…。そんなにみんなが心配する業務できるんだろうか。1週間前からこのことをみんな気にしてたんだ。不安でいっぱいになりながら帰宅した。取りに行った忘れ物はそのままだったのでよけいに気分が重くなった。

私の職場は、大学事務課。仕事内容は備品の手配や学生の履修や奨学金手続きに始まり、時期によつては成人式用の着物の見本市や一人暮らしの不動産紹介なども企画する。まあ大学の何でも屋だと言える。

今朝、朝の伝達が終わつて主任から声をかけられた。

「タマさん、ちょっと新しい仕事教えるから来てもらえる？すぐそこだけ外にでるから」

昨日言っていた件が来たのか。でも、外？

疑問が多いが、待たせるのは悪い。準備をする。

とは言つても、秋口で少し涼しくなってきたためカーディガンを羽織るだけだ。

「おまたせしました」

「じゃ、行こうか」

事務室を出て、通用門へ抜ける。でも、この道は正面から右方向は附属幼・小・中に囲まれていて、左方向には池と住宅地と農水学部の放牧地しかない。

戸惑う私を置いて、主任は進んでいく。牛かヤギに用事でもあるのか？

でも、目的地には牛もヤギもいなかった。

連れてこられた先は、神社だった。古い鳥居に板がかかってそれに墨でかろうじて読める程度に烏帽子神社と書かれていた。農水学部の放牧地に食い込む形でその神社は建っていた。

「おはようございます。烏帽子様、いらっしやいますか」

返事はない。朝、早い方であ。もうお出かけかもしれないなあ。主任がぼやきながら待つ。

返事がないなら、一度帰ったほうがいいのではないだろうか。でも、主任は帰る様子はない。

「主任、神社の方に用事なんですか？」

新しい業務内容の検討をつけたいと思つて質問したけど、主任は答えず、別の話を始める。

「タマさんは、神様つて知ってる？」

「神様つてあの神様ですよ？人並みには……」

世界には動物と人類以外に神族がいる。動物と人類の違いは、直立二足歩行ができること・言語使用・火を含む道具使用等があげられるが、そういった点では神族もほぼ人類と一緒にあるらしい。違いをあげるならば、人類にはない不思議な力があり、その力を使って五穀豊穰や商売繁盛等、祀られた神社で仕事をしているらしいが、完全世襲制で、人前には滅多に出てこず神族の生活は謎に包まれている。学校でならつた神族に関する基本を思い出す。

主任はまだ話を続けようとしたが、そこへ男児の声が入ってきた。

「おはようございます。佐々木さん、お待たせしました。ああ、新しい人が来たんですね」

私を見て何か納得したように主任に話しかける。

上司が様付けで呼ぶその人はどれだけ偉い人なんだと思っていたけど、少年だった。

戸惑っているうちに、次のような紹介をされてさらに驚いた。

「ウチの事務員の環です。次代お世話係として本日は連れてまいりました」

子供の世話係ってなんぞと思ったが、そんな疑問は次の説明でふつとんだ。

「環さん、こちら烏帽子様です。神様だから」

主任、この少年どう見ても中学生ですよ？さらっと流しましたけど、あの神様ですか？こんな簡単に近所に出かけて出会えるはずがない。いろいろ主任に聞きたいけど、とりあえず、後回しだ。

カーディガンのポケットに入れてあった名刺入れを取り出す。

「ご紹介にあずかりました環と申します。よろしくお願いします」

「ああ。名刺もらったのは初めてだな。生憎、こちらは持ち合わせしていないので失礼します。ここの神社で祀られています。みんな烏帽子と呼びます。どうぞよろしく」

初めての名刺が珍しいらしくて裏表ひっくり返して見ている様は、宙にさえ浮いていることと外見に似合わない言葉使いさえなければ本当に子供にしか見えない。

「タマさんは、今日から烏帽子様のお世話係ね。烏帽子様は大学をご加護くださっているんだ」

なんだか私の新業務がさらっと告げられたような。業務内容が耳から入って頭で理解できたとき、あれ？名刺差し上げてませんでしたか？私の名刺です。どうぞ。主任は神様に名刺を出していた。

主任、軽すぎですよ！！

顔合わせが済んだところで、烏帽子様が用事の途中だったからと戻っていかれた。

「神様の世話役って何するんですか？」

「うーん。烏帽子様は結構何でも自分でされる方なんだ。びつくりするくらいフットワーク軽くてねえ。何かあったら、あちらから仰るよ。それより、社周辺の異常とか敷地にゴミが落ちてたら気にかけて。」

要するに、神社周辺の見回りをすればいいのか。このささやかな神社の見回りで、大学全体の平穏があるならお得だ。幸い、この先の住宅街に私の住むアパートはあるので、朝・夕の通勤時に異変がないか確認しよう。

記念すべき神様初遭遇を果たしたその夜、TVでカレー特集が組まれていた。

名店からB級カレーまで幅広く取り扱い、最近は種類が豊富であるナンまでおまけコーナーを作って、TV画面のこちらまで匂いがきそうな美味しそうな特集だった。

既に夕食を用意していなければと忸怩たる思いを、翌日の学食でぶつけたが、私のカレーを欲する気持ちは学食のおばちゃんのカレーでは治まらなかった。食べ終わっても、私の心はカレーで染められていた。野菜を一杯入れたカレーに少し贅沢して好物の海老を入れて・・・と今晚のメニューが決まりかけた時、横に座った学生がカレーうどんを食べているのを見て、気持ちが揺らいだ。

米もいいけど、うどんも捨てがたいと。

しかし、カレーにはごろごろとしたジャガイモが必要不可欠というこだわりがあるので、今日の夕飯をカレーうどんにしても、カレー欲は治まらないだろう。ならばどうするか？私はジャガとうどんの共存の道を探した。そして、カレー鍋という存在に行き当たった。しかし、私には鍋は一人でするものではないというこだわりもある。つまり、カレー鍋を食べるには誰かを誘わないといけないのだが、地元を離れ新しい土地で一人暮らしている私には、鍋に誘える程、親しい友人はいなかった。カレー鍋を諦めないといけないのか、こんなに食べたいのに。私の心はもうカレー鍋のものなのに。

そんな私でも仕事はちゃんと済ませた。仲の良い先輩達にお誘いをかけたが、残念ながら用事があるとのことでお断りされた。

最後の希望を失って悲しみにくれたところで烏帽子様に声をかけられた。

「こんばんは。昨日はどうも。お帰りですか？」

余程のことがないと神様には会えないはずなのに、あちらから話しかけて来られて驚いた。

頭の隅で、神様もカレー食べるかな？ほぼ初対面だけど、誘うだけ誘ってみようと思える私が出た。よく話したことのない神様に誘いをかけるほど、その時はカレーに心を持っていかれていた。

「烏帽子様、カレー鍋を知ってますか？」

暗くとぼとぼ歩いてきた私が、いきなりカレー鍋のことを聞いてきたのにびっくりしたのだろう。烏帽子様は少し引き気味だ。

「カ、カレー鍋ですか？名前だけは知ってますけど、ウチでカレー系をすると匂いがついちゃうから食べたことはないんですよね。学食で鍋フェアでもしてくれたらいいんですけど…」

どこか寂しそうに言う烏帽子様。確かに、寂れてるとはいえ神社からカレーの匂いがしてはいけないだろう。手ごたえはあった。

「煮込まれたとろとろの長葱、ホクホクのジャガ、甘みのあるにんじん、プリプリの海老、今の季節ならきのこを入れるのもいいです。全ての具にだしで割ったカレーが絡むのです。そして、締めにごとうどん。あ、締めはご飯派なら、上にチーズを乗せるのも美味しいんですよ」

そこまで一気に述べて、尋ねる。

「カレー鍋食べたくありませんか？」

しばらくすると烏帽子様の唾を飲み込む音が聞こえた。

その日の夕食は楽しかった。念願叶ってカレー鍋を食べられたこともあるが、久しぶりに1人でない食事が出来たのだ。

謎に包まれている神様ということに緊張していたのだが、意外なことに烏帽子様は庶民派だった。

月毎に変わる学食フェアを楽しみにしていることを語り、大学近くの定食屋の裏メニューまで教えてもらった。色気より食い気の私はとても素敵な情報をもたらって感謝した。

「いや、長生きしていると食べることにくらししか楽しみがなくて……えへへと照れ笑いしながらビールをグビツと飲む烏帽子様も楽しそうだ。

見た目が中学生なので最初は止めたのだが、私より長生きしているという主張に基づき烏帽子様のアルコール摂取はなされた。

「これっくらいじゃ、酔わないよ」

500ml缶3本目に突入しながらケラケラ笑っている烏帽子様は真っ赤だ。

かく言う私もすでに真っ赤になっている。いつもは弱いのでほとんど飲まないのだが、目の前の酔っ払いがしつこくすすめてくるので断りきれなくなり、コップ一杯の付き合い酒でこの有様だ。

続いて、初めて食べたカレー鍋の感想や他に入れたらいいと思われる具材も熱く語り合った。

烏帽子様の熱いカレー鍋に対する意見に、いかに今回のカレー鍋の布陣がベストかを反論したり、提案された新しい具材を検討したり忙しかった。一巡して、最後の具材はジャガイモだ。

「煮込むならメークインだ!!」

「煮崩れより男爵のホクホク感をとったんです。逆に煮崩れがとろみとなり、最後のうどんとの絡みにつながります。私はカレー鍋には男爵がベストだと信じます!!」

「わかった、わかった。でも、君には、冒険心が足りない。アスパラを入れてみてもいいじゃないか。絶対にあうと思う」

「今回は、オーソドックスなカレーをテーマに具材を決めたのですよ? 冒険など無用!!」

ダンツと互いにビールが入ったコップをテーブルに置き、むうーとにらみ合う。

「君がそう言った所で、実際に食べなくては決められないね」

そんな次回持ち越し意見が出されたところで、結局、第2回カレー鍋会を必ず実施することを約束しあい、その日は解散した。自宅の狭い玄関で靴を履いた烏帽子様がしゅつと消えるのを見て、すっかり忘れていたが神様だったのを思い出した。

酔いもさめた翌日、なんとくだらない会話をしたのかと昨夜の醜態を後悔したが、とりあえず、仕事だと神社へ向かった。あちらも昨日の様子を覚えていたようで、2人とも同じような情けない顔でいるのを見れば、お互い自然と笑いが起きた。

「昨日はお邪魔しといてあんなに酔ってしまつて申し訳ありませんでした。いつもと勝手が違つたものですから」

「いえ、楽しかったです。2回目は烏帽子様が提案してくれた具材でいきましょう」

「また懲りずに呼んでくれますか？」

「ええ、もちろん。もし、よろしければ、また来ていただけるとうれしいです」

カレー鍋の具材で絡み酒を展開する烏帽子様は、既に神様のありがたみを感じない。それより美味しいものが好きな変な友人という枠に収めた。就職してから初めて友人ができたことが嬉しかった。

2 狛犬

神様の世話係になってから1週間、朝夕に神社見回りをしてみても、見過ごせない点があった。

「草むしりしたいんですけど、都合の悪い日ありませんか？」

ここの神社は、社自体はしっかりしているが、鳥居から社へ続く石段や石畳の隙間から青々とした草が生えているせいで雰囲気は廃墟っぽい。他にも神社を囲む石垣や社周辺にも雑草は蔓延っている。なぜ、こんなになるまで放っておいたと詰め寄りたいが、神様だつて忙しいのだろう。正直、面倒だったが、世話係としてむしろうと決意して尋ねた。

幸い、いつでもよい、歓迎すると言われた。

草よ、むしつてくれるわ。虫除け、UV対策ばつちりの完全防備の姿で神社の前で仁王立ちする。少しでも気合を入れないと、面倒という気持ちかむくむくと起き上がってくる。

黙々と草むしりをするが、それでも、鳥居周辺の石段と石畳しか終わらない。根深く生えているので、力いっぱい引き抜くと時間がかかる。大きなカブでも生えているのかと思うくらい全身の力を使わないといけなかった。

「はあ、暑い。10月もそろそろ半ばなのに、日差し強すぎ。風は涼しくなったのに」

ぐちぐちと天気文句をつける。10月に入っても日中なら半袖でいけてしまつ日差しの強さ。きつと南国特有だな。

ずっとしゃがんでいたのでも少しびれてきた。立ち上がって腰を伸ばす。ラジオ体操の要領で少し捻りをいれると、バキバキつと骨がなる音がした。運動不足を実感させるものすごい音で、出した本人だというのに引いてしまった。

「お姉さん、お疲れ様です」

後ろから小さな男児達の声があった。烏帽子様とはまた違う声だ。振り返るとそこには、中型犬サイズの立派なたてがみの獅子と同じくらいの大きさのちよんと角が生えている白い狛犬がいた。狛犬君は尻尾をぶんぶん振って歓迎してくれている。

「獅子の阿と狛犬の吽です。」

狛犬と言えば、ここにも神社の門番として鳥居の辺りにいたなあと思えば、今は台座だけになっている。

「もしかして、ここの狛犬さん達かしら？」

「はい。お姉さんが、草むしりしてくれてすっきりしたからお礼を言いたくて出てきちゃいました」

まだまだ終わらないけど、労ってもらえともうひと頑張りど気がわく。

それに、今はにやにやが止まらない。一人暮らしになり飢えていた動物とのふれあい。しかも！！しかも、どうなっているのかは知らないが、石像でない生身の身体。おまけに意思疎通が図れる。素敵！！

おうおう、つやつや毛並みじゃないですか。たてがみもふもふじゃないですか、触らせてくださいよ。頭なでさせてくださいよ。腕太

い。くはっ、だーきーっーきーてえー。一瞬にしてセクハラ紛いなことを考えた。悟られたら引かれる。びーくーる。びーくーる。

「環です。なでてもいい？」

わいた気力はとりあえず置いて、今から休憩時間です。

2匹ともお座りをしてなでやすいようにしてくれた。お利口だ。

草をむしりやすいようにジャージ姿なので抜け毛が付こうが気にせず、まず阿君をなでることにする。

獅子ならきつと猫と一緒にだ。猫が気持ちよがるポイントを強弱をつけてなでさせる。ここがええんか、ん、ええのんか。と調子に乗っていたら、突然烏帽子様が現れた。

「どこのスケベ親父ですか。ウチからなにか変な気配がするから戻ってきてみれば……」

呆れつつ怒られてしまった。さすが、神様。離れていても私のセクハラな気持ち伝わってしまいましたか。

「ごめん、久しぶりに動物とふれあえて調子に乗っちゃった」

「主様、僕もうダメです。お姉さんから離れられません」

突然、変なことを言い出したのは阿君だ。怒られているので耳が伏せているが、私の足元で身体をくねらせている。実家の猫の為にでテクでめるめるにしてみましたらしい。

「仕事帰りにしてあげるよ？ 阿君もずっと座りっぱで暇でしょ。一緒に散歩行く？」

怒られてる最中だったけど、あんまりにもかわいいのでぼろりと言ってしまった。

目を輝かせる阿・吽君とは反対に烏帽子様は渋い顔をする。

「ダメですよ。これから冬に向けて寒くなるし、暗くなる時間も早くなるんですから。女性が遅くなるものではありません。だいたい吽は角生えてるのを見られたらどうするつもりですか」

「でも、主様とは全然手つきが違うのです。この方じゃないと嫌です」

阿君、それは飼い主の心を抉る一言だよ。言っちゃダメだよ。ほら、烏帽子様もシヨックを受けてるよ。

「お前とは200年一緒に暮らしてきたのに……。そんなに環さんがいいなら、環さんちの子になっちゃいなさい」

ええー、何その台詞。200歳以上の神様の拗ね方としてはどうなの？

でも、これ以上こじれる前にちゃんと言わなきゃな。

「ウチはペット不可なんで引き取りはお断りです」

「……………」

え、なぜ烏帽子様と阿君は黙っちゃうのさ？

この混沌とした空気を治めたのは、ずっと黙っていた吽君だった。

「では、こうしましょう。どうせ主様は日が暮れると帰ってこられるのですから、環様にはお仕事帰りに寄ってもらい、阿を心いくまでかわいがってもらおう。そして、僕を散歩がてら主様が環様を送っていかればいいのです」

おお、私の希望も阿君の希望を叶えつつ、ちゃっかり吽君の希望も叶う素敵な提案だ。ただ問題は、忙しいはずの烏帽子様が諾としてくれるかだ。

3人（1人と2匹）のきらきらした視線が烏帽子様に集中する。しばらく悩んでいたようだ

「夜はすることがないですし、いいでしょう。その代わり、これからも阿・吽は留守番をしっかりしてください」と言ってくれた。

「主様ありがとうございます」

阿・吽君があつという間に烏帽子様に群がる。やはり飼い主には勝てない。

「環さんもウチの子達をかわいがってくださいるのは嬉しいですけど、ご自分のことも気をつけないといけませんよ」

「烏帽子様、ありがとうございます。あまり遅くならないようにするけどよろしくね」

そういったところで、2時限目終了のチャイムが鳴っているのが聞こえた。

「あら、お昼だ。午後は事務室で仕事なんで、社のほうはまた明日の午前中に。じゃあ、また」

抜いた雑草を集めておいたゴミ袋を持って事務室へ戻ろうとする。

「あ、ちょっと待ってください」

烏帽子様から引き止められた。烏帽子様は社の中に入って、また出てきた。あの中どうなっているんだろう。人の家を覗くなんて普通はしないけれど、居住スペースとしては不十分な広さしかなさそうな社を見ていると気になって仕方がない。

「環さん、これ。今日のお礼です。今日していただいた分だけでも随分すつきりとして見栄えがよくなりました。暑い中、ありがとうございます」

にっこり笑って差し出されたのは、市販のアイスティーと焼き菓子

だった。受け取ったアイスティーはよく冷えている。わざわざ用意
してくれていたようだ。

「うわぁ、ありがとうございます。早速お昼にいただきます」

烏帽子様と阿・吽君が鳥居のところで見送ってくれる。

「「またね」」

君らは双子か！？シンクロかわいいなあ。

予想外のお礼と狛犬達のかわいさに励まされて明日の草むしりも頑
張ろうと固く決意をする。

その決意は、翌日にきた全身筋肉痛のせいで脆くも崩れ去ることに
なる。

3 約束

「来月は大仕事があるからねえ。体力作りしておいて」
主任から10月に入った頃言われたことだ。

「はい」

とりあえず、返事はしたものの、はて、キャンパス案内や教育実習の影響で一番後期が始まるのが遅かった教育学部でさえ受講登録は既に終了、入試にいたってはもう少し先、11月に一体なんの大仕事かと疑問顔の私に先輩が教えてくれた。

なんでも、徹夜でハメを外しすぎた集団酔っ払いを止める仕事が出来待っているらしい。

端的過ぎて要領を得なかった私はもう少し詳細を求めた。

我が大学は、総合大学として、学生だけで1学年約2000人が毎年入学する。それが4学年。もちろん院生や留学生も毎年11月初旬に行われる大学祭には参加をするので、学祭といえども、約9000人規模のお祭りになる。6年制の医・歯・薬学部が別キャンパスになっていなければ、1万人を超えていただろう。

期間も会場設営準備から後片付けまでいれると約4日間と長い。

近隣の小・中学校から運動会などで使うテントを借りてきて、その周囲をブルーシートで囲み簡易屋台を制作。そして、夜間はガスボンベやコンロ、そして借りてきたテントそのものの盗難に備えて当番で泊り込みをする。

・・・というのは建前で、夜はみんなテントを寢床とし酒を飲みハメを外し大盛り上がり、一部では昼の屋台とは違った夜用メニューも存在。昼は一般客、夜は学生客を相手とし、本祭の3日間は止まることなく続く。

日中の学祭は、大変活気があって屋台も物珍しいものがあり、見て

いるだけでも楽しい。しかし、夜間はハメを外した一部の馬鹿共がくせいが急性アル中で運ばれたり、酔っ払いが暴れて学舎の備品を壊したりとやりたい放題になる。

近年は、あまりのアルコールトラブルに大学側がアルコール管理の徹底や電気供給時間の短縮を学生側に通告したが、それでもOB・OGの出入りもあり慣習として夜間のどんちゃん騒ぎは続いている。その為、大学事務職員が定期的に見回りをし、行き過ぎた騒ぎを止めるように3年前から見回り隊を組んでいる。

一部がくせいの発音に力を込めた先輩にそこまで詳細に説明してもらい私は納得した。

つまり、徹夜でハメを外しすぎた集団酔っ払いを止める仕事が来月待っているというどうしようもない事実を。

11月に向けて気が重くなったのは言うまでもない。

烏帽子様に畔君の散歩も兼ねて自宅まで送ってもらおうようになってから、2週間。もう11月は目前だ。

草むしりも終えすつきりした境内は広くなり、烏帽子様の好意で上司命令の体力づくりの運動に使わせてもらっている。

「烏帽子様は大学祭に行ったことある？」

先輩から話を聞いて漠然と大変そうだという感想はあっても、体力づくりまでしななければならない大学祭の想像がつかない。

「ええ、あります。ちなみに、おススメは留学生の方がされる屋台です。毎年お国が違う方が指揮をとられるみたいで、日本では食べられないような美味しいものが見つかりますよ。ただそのように変わった屋台や催しがあるので、それを目当てとしたお客様も多いよ

うですね」

珍しい屋台があるとは聞いていたけれど、留学生の屋台ね。チエック入れとこう。

「烏帽子様は常連さんですか？」

「こんなに近くに住んでますからね、楽しいものには参加しなくちゃ。環さんも一緒に行きますか？案内しますよ」

「いいの！？烏帽子様に案内してもらえるなら美味しいとこチエックできる〜。お願いします！！」

「3日間ありますけど、いつにしますか？最終日は売り切れの恐れもあるので、私としては初日か2日目に回りたいです」

わざわざ売り切れの心配をするなんて、きつと経験があるんだろうな。完売の札を前にして、がっかりしている烏帽子様が浮かぶ。

私には2日目の夜に見回り当番がある。日中は徹夜に備えて休みたい。

「それなら、初日がいい」

「では、11時頃にここに集合でいいですか？」

「いいとも〜！！」

烏帽子様にふふって笑われた。

「環さんは美味しいものになると反応が違いますね」

はっと気がついた。楽しみだけど、屋台巡りの約束してる場合じゃない。

改めて、夜間の様子を聞いてみる。

「そうですね、連休を利用して行きますから、全国各地から卒業生の方が顔を出されるみたいで親睦会をしています。契約で大学守護

が入っているのを見守っていますが、人死を出さないように毎年大変なのですよ」

烏帽子様は苦笑いで言うけれど、人死が出るかもしれない大学祭に私は怯えた。

「環さんは初めてでしょう？驚くでしょうけれど、今年は私と佐々木さんと環さんで見回ると聞いています。私が何もないように守りますから心配ないですよ」

烏帽子様、なんだか胸がきゅんしました。たとえ声変わりしてない男児からでもそんなことを言われると嬉しいものです。

「ただ夜間は構内を裸で歩いている人がいても普通だと覚えていてくださいね。下手をするとそういった方が集団で歩いている場合もありますから。念のため蘇生法も覚えておいてください」

烏帽子様、それは本当に大学祭の話ですか？

…予想以上に激しい大学祭が私を待っているようだ。

烏帽子様が質の悪い冗談を言うとも思えなかったので、構内のAEDの設置場所と教習所の教科書に載っていた挿絵付き心肺蘇生法を夜な夜な枕相手に復習すれば、1週間はあっという間に過ぎた。

大学祭終了後にはこのことが笑い話になるように、自分を含めみんなが怪我なく無事に過ごせるようと、大学祭を明日に控え、烏帽子神社にやってきた。

神社で作業をするときには挨拶代わりに参拝するようにしていたが、願掛けは初めてだ。

二礼二拍手一礼。最後によりしくお願いします。心の中でそう結べば「よろしくされました」

後ろから烏帽子様が現れた。

願掛けなのだから、烏帽子様にも届いているだろうけれど、なんだ
が見られたのは恥ずかしい。

「ところで、佐々木さんが探していましたよ」

密かに照れている私には気づかないまま、烏帽子様は主任からの伝
言を教えてくれた。

一日がかりで植物園や図書館のガラスが割られてしまわないようベ
ニヤ板やガムテを貼り終わり、今日の仕事は終了とここまで来たの
だが、実は未開放区域へ立ち入りされないようにバリケードを築く
作業が全講義終了後にあっただらしい。朝の伝達の途中で、備品を取
りに来た学生の対応した為、その部分を聞き逃してしまったのだ
ろう。

慌てて戻る。

「伝言ありがとう」

「いいえ。頑張ってください。明日11時に会いましょう」

烏帽子様は笑って手を振ってくれた。

4 大学祭

昨日と見る景色は変わらないはずなのに、今日から11月という事実が見るもの何もかもを秋と感じさせる。澄み切った空や黄葉を始めたイチヨウ並木を眺めながら自宅から烏帽子神社まで10分ほど歩いてきた。

同じ道をちらほら大学へ向かう学生達がいたので、鳥居のところにいる男性を見ても、誰かと待ち合わせをしているのだと気にならなかった。

それでも、知らない人と同じところで待つのは嫌だったので、すれ違う際に目が合った男性に会釈をして、社のほうへ石段を登る。なのに、男性もついてきた。それだけでなく、声までかけてきた。

「おはようございます。環さん」

なぜ私の名前を知っている。誰だ？思い出すまで頑張れ、私。

「おはようございます」

「今日は楽しみましたよね。とりあえず、おススメの留学生屋台に最初に行きましょうか」

「テンション高いな。ん？なんか一緒に屋台を回ることになっているけど、ナンパ？」

「おススメの留学生屋台？ん？んー、顔の系統が待ち人に似ていることに気がついた。」

「もしかすると、烏帽子様のご家族ですか？」

「え？いやだなあ、環さん。烏帽子ですよ」

「え？」

烏帽子様って、だいたい中1くらいの紳士よね？なぜ、三十路手前くらいの貴方が烏帽子様なのだ。

「環様、この方は主様で間違いありません」

「フォローをくれたのは吽君だ。男性を避けて石段の端を登っていたので、声をかけられたときにちょうど吽君の前にいたのだ。」

「主様も、普通はいきなり成長したら別人だと思われるのですよ。しっかり環様に説明してあげてください」

確かに、説明してください。

「環さんは、神無月って知ってますか？」

「出雲地方に神様大集合で、それ以外の地域は留守になってしまうからついた陰暦の10月のことですよ」

「そうです。最近是人に合わせて新暦で集まるようになりまして、10月中は出雲に出張していました。でも、ウチはご神体の都合上、完全に留守にするわけにもいかないので、留守番を作って置いたのです。恒例なので、佐々木さんから説明を受けていると思っていたのですけれど、驚かせたみたいですね。あ、お土産があるので帰りに渡しますね」

わざわざ買ってきてくれたのは嬉しいが、今は最後の一文を無視して考える。

「えっと、では、あの少年烏帽子様は分身みたいなもので、貴方が本体ということですか？」

まだ男性を烏帽子様とは思えず混乱していたので、失礼な言葉を使ってしまった。

「本体といえば、本体です」

何度か見たことのある苦笑いを披露してくれた。それを見てやっと

少年の烏帽子様がこの人なんだと分かった。不思議な感じだ。いつも私の肩の位置で合わせていた視線が、上向きになる。男児なら平気なのに男性と意識してしまえば、緊張する。

「環さん。どうしましたか？」

「文系だったおかげで高校の頃から男性と話す機会が極端に減りまして、お恥ずかしい話ですが、大人の烏帽子様に緊張しています。そのうち慣れると思いますから、心配しないでください」

タメ語でいいよと言ってもらったので、今までそれで通していたのに、急に丁寧に話し出したらそりゃ気になるだろう。神様に隠し事をして仕方がない。素直に緊張していることを告げる。

「一緒に鍋をしたり、畔を散歩させながらお話をしたではありませんか。ふふ。中身は変わりませんよ。さあ、行きましょつか」

中身は一緒と呪文を唱えるが顔は赤いまま、狛犬達に見送られ大学まで歩く。

神社から一番近い通用門から大学に入るが、喧騒は聞こえても屋台が見当たらない。私がかよるきよろしているの、烏帽子様が説明してくれた。

「屋台は、学食前の大通りを中心にでているので、第2体育館を過ぎないと見えないと思います。留学生屋台は正門の広場に出ていますので、下見も兼ねて大通りを突っ切って行きましょ」

烏帽子様の提案を受け入れたことを後悔したのはそれからすぐだった。

「あ、烏帽子様だ。彼女ですか？」

何度目だ。やめろ、顔が赤いのが治まらないだろ。というか、みんな

な神様相手にフレンドリーだな。

「違いますよ。友達です。またあとで来ますね」

烏帽子様はいろいろな屋台から同じ内容を話かけてくる知り合いに会うたび同じことを言っていて手を振り進んでいく。大通りは、一つでも多く売ろうと売り子や、屋台に立ち止まる老若男女のお客さんでごった返していたが、烏帽子様の後ろについていけばものすごい混雑だったのに誰にもぶつかることなく目的地の広場につくことが出来た。

「あ、あった。毎年同じところに出してくれるから、探さなくてもよいので楽です」

広場には、買ったものが飲食できるようにフードスペースも設けてあり、その奥に目的の屋台は出ていた。

屋台にいろいろな国旗が飾られており、一番目立っていたのは日の丸と中国の国旗だった。

「それぞれの出身国の旗が飾ってあるんでしょうね。全部の国名は分からないですけど、アジア圏が多いですね」

手書きの品札を見ると、メインは中華のようだった。

「何年前にここで出された中華ちまきは絶品でした。また美味し
いちまき食べられるかなあ」

烏帽子様の希望通り中華ちまきもあったので、2人で並んで購入して飲茶する。

出来立てほかほかの中華ちまきを、アチアチしながらタコ糸を取り竹の皮を剥がす。

もち米で作られたちまきは、見るからにもちもちとして蒸気でつやつやと光っていた。食べると、出汁をよく吸った米の旨みが広がり、

口から鼻へ香りが抜けていく。また鶏肉が大きなのも嬉しい。

「美味しい!!」

美味しすぎてびっくりした。烏帽子様からおススメと言われても、学生屋台だからと少し穿った目で見ていたのが申し訳なかった。

「でしょう!! また学祭期間限定なのが憎らしいのですよ」

同じように食べてニコニコしている烏帽子様が言う。

「いや、それを言わないで」

「それもまた来年の楽しみですね」

自分の分を食べ終わってもまだニコニコしてこちらを見ている烏帽子様に疑問を覚えて聞いてみる。

「言葉遣い、元に戻りましたね」

はっ、美味しいものってすごいな。緊張が飛んでいった。

遅れつつも大満足で食べ終わると烏帽子様が

「実は、友人からそれぞれ食券をもらいました。3日間で順番に回ろうと思うのですが、この中で食べたいものがありますか？」

うどん・そば、サーターアンダーギー、焼き鳥、カレー、たい焼き、パイ、ポテト、おでん、じゃがバターと色とりどりの食券が現れた。書いてある店名はひとつとして同じものはない。学生でない烏帽子様がどうやってこんなに知り合いができたんだろう。不思議だ。

「どうしてこんなに学生に知り合いがいるの？」

「朝のうちは、附属校の方の交通安全指導とか大学巡回をしているのですが、午後は空いている時間があれば、面白そうな講義を受けたりしてるのです。そこで知り合いました」
そんなことをしていたのか。

「もともとはウチの近くに面白そうなものが出来たなあとここにもぐりこんでいたのですが、あるときばれてしまって、それで当時の学長と話しまして、大学を守ってくれたら自由にしてもいいよって条件をつけられちゃって。お金を払わずに講義を受けていた弱みもありましたしね。それで今に至ります」

「前々から思ってたんだけど、大学を守るって鼻肩みたいな感じで神族のほうから咎められたりしないの？」

烏帽子様がどうして大学守護をしているのか理由が聞けたので、思わず日頃の疑問もぶつけてしまった。

「まあ、守るといっても、怪我をしにくくなるとかそういう類なんです。就職が100%うまくいくとかの特別鼻肩はしていませんから、氏子を見守るといふことで多めに見てもらっています」

へえ、例の出雲の神様会議で報告したのかな。

「まあそんなところです」

「聞かせていただいてありがとうございます。あとここに行ってみたいです」

話を聞くきっかけになった食券の中から行きたい先を選ぶ。

「いいでしょう。行きましようか」

その後は、屋台中心といっても胃の限界があり、消化を助けるためにひたすら大学構内を歩いた。

参加型展示系を覗けば、理工学部ではダイラタンシー現象が体験できる公開実験教室が行われていたり、馬術部が乗馬教室を開いたり飽きることはなかった。

珍しい体験ができたと言うのもあるが、片栗粉の上で一生懸命足踏みをし続けたり、久々に馬に乗ると興奮気味だったりする烏帽子様を見ているだけで楽しかったというのが大きい。

「いや、楽しかったですね。環さんのおかげで男一人だとかなか参加しにくくて、今まで遠慮していたのにも行けました」

「こちらこそ。まさか大学祭で新鮮お野菜と産みたて卵をあんなに激安で手に入れられるとは。そのうえ、荷物まで持ってもらっちゃつて。今度、何か作ってきますね」

畜産科&農耕科侮りがたし。もともと営利目的で作っていないものを大学祭でさばくのだ。その上、人件費もない。大部分の学生と同じように彼らも、売り上げから学祭打ち上げ費用と学科の1年分懇親会費用が手に入ればいいのだから、無人販売所並みの安さから値引きされる野菜が続出した。

少し怖かったが、その安さには勝てず、マダム達が目の色変えて買物をしている中に混ざってきた。袋では入りきらず用意された空きダンボールに野菜を詰めて帰るマダム達のまぶしさったらなかった。

そんな私も、戦利品は烏帽子様が抱えてくれている。サツマイモやたまねぎなどの詰め放題にチャレンジしてしまったのが原因で、重たくて腕が千切れそうになっているのを見かねた烏帽子様が持ってくれた。

日が暮れ、薄暗くなった道を自宅へ送ってもらおう。

「そろそろ見回りの集合時間ですね」

夜が近づいてくる。暗くなっていく私を見かねたのか

「明日はちゃんと守りますから大丈夫ですよ」

烏帽子様は1週間前に言ったことをもう一度言ってくれた。

違うのは、言った烏帽子様が中1サイズではなく私より年上の男の人ということだ。

返事ができなくて黙っている私に重ねてもう一度。

「大丈夫ですよ」

安心させるように肩をポンッと叩いてくれた。その手の暖かさ大きさは烏帽子様の目的通り、私をちゃんと安心させてくれた。…顔を赤くさせるつもりはなかっただろうけど。夕暮れ時でよかった。いつの間にかアパートの前に着いた。照れ隠しにさっき買っていた物を渡す。

「あ、これ阿・咩君にお土産です。畜産科特製ジャーキーです。塩分控えめに作ってたって言うてました。今日はありがとうございました」

ペコリと頭を下げてウチに逃げ帰った。感じ悪かったな…。

5 見回り

すでに21時をまわり電力供給時間が終了したのになぜか明るい構内には、どこを向いても酒臭いとしか言えない状態だった。

21時を過ぎれば暗くなると思っていたが、ランタンや、古参サークルなどは発電機まで用意して電力供給時間終了後の明かりを確保し、夜通し飲み明かそうとしているらしい。一体、君達はどこへ向かおうとしているのか。そこまで酒好きではない私としては、彼らの情熱が理解できない。

手には懐中電灯を、私服の上に蛍光イエローの大学事務ジャンパーを羽織り、主任と烏帽子様は私を挟みながら歩いている。先輩や烏帽子様から話を聞きつつ、夜間の大学祭とは歓楽街のような感じではないのかと考えていた私は、甘かった。

先ほど、裸の男子学生をご神体様じゃー、神輿じゃーと叫びながら担ぐ20人程の集団にかち合ったときにそんなことを思った。

「今回はおとなしいですねえ」

「ええ、本当に」

私の頭越しにそんな話がなされているが、信じられない。止めなくてよかったんだらうか？止めるのが、今日の仕事なんじゃないのか？

「止めなくてよかったんですか？」

「止める基本は、器物損壊・暴行・性犯罪・事故につながりそうなことをしているときかなあ。さっきのはひっかからなかったよ」

「主任、普通、屋外で全裸は性犯罪ですよ？」

あつて顔した！！

「ふふ、大学祭中の全裸なんて普通すぎて忘れていました」

烏帽子様、爽やかに笑ってもフォローになっていないです。

1時間かけて、運動系サークル棟からS字を描くように構内の1回目の見回りが終わらせ、大学事務室へ戻る。時折、遠くで雄叫びが上がったり、なぜか太鼓を叩く音が鳴り響いていたりしたが、すれ違う学生は、みな酔っ払っているけれど暴れたりはしていなかった。今はまだ宵の口だそうで、これからが大変らしい。

「まだ11月だから凍死の心配はないけど、路上で寝ている学生さんとか、飲み歩き中にはぐれてしまった女子も出てくるし、とにかく見つけたら保護で。とりあえず、休憩しましょう」

緊急時に鍵が必要になることもあるので、大学祭中は鍵当番が置かれる。3年前からは見回り当番も出来たため、1度見回りを終えたら事務室に帰り鍵当番と交代というスタイルになっている。鍵当番は、夜間は男性だけだったのだが、見回りもとなると人数が足りないの、私のように女性も当番に入り、負担の多かった男性がより休憩を取れるようにした。

トランシーバーやジャンバーを脱ぎ、コーヒーを入れる。主任は携帯をチェックすると電話のため奥へ移動した。

「お疲れ様でした。はい、コーヒー」

砂糖とミルクはセルフでお願いします。事務室の隅にある応接セットのソファアームに座った烏帽子様にコーヒーを差し出す。テーブルの上には籠に入れたスティックシュガーとコーヒークリームを乗せた。

「ありがとうございます」

そのときだった。主任の焦るような声が聞こえてきた。

「まだ予定日まで1ヶ月もあるじゃないですか。大丈夫なんですか
!?!」

主任の言う予定日とは、きっと奥さんの出産予定日のことだろう。
初子ということで、まだ生まれる前から奥さんの惚気と共に色々聞
かされてきた。何があったのだろうか。

「どうしたのかな?」

不安に思い、烏帽子様に話しかけてみる。でも、烏帽子様は先ほど
まで座っていたソファにはもういなかった。

「佐々木さん、こちらは私達に任せて行ってください」
電話している主任に話しかけている。

「いや、しかし・・・」

「見回りは2人で大丈夫です。任せてください」
神様に任せてくださいって言われたら、逆らえないよね。

「…本当にありがとうございます。でも、課長に相談をいれてから
まだ続いていた電話に何か二言三言伝えてから、課長へ電話をかけ
なおす。」

「タマさん、課長が代わってって。はい」

いつも通りの口調だが、顔が真っ青な主任から、状況が掴めないま
ま電話を代わる。

「代わりました、環です」

「あ、お疲れ様。タマさん、佐々木君の奥さんが救急車で運ばれた
ということ、今日は烏帽子様と一緒に見回り、鍵当番してください
い。初めての学祭で戸惑うこともあるだろうけど、明日もあるので
これ以上の変更は難しいので、よろしく頼むよ」

主任の奥さんが救急車で運ばれたくんだりで驚いたが、課長に告げられた内容はもつと驚いた。でも、主任の奥さんは県外出身で親戚はそばにいないって聞いている。今、傍にいられるのは主任しかいないんだ。

誰にだって初めてはあるのだ。まだ烏帽子様が一緒についてもらえるだけいい方だ。

迷いはしたが、私が出来る返事はひとつ。

「はい。わかりました」

お願いしますの意を込めて、見つめてくる烏帽子様にうなずく。

「本当に申し訳ありません、どうぞよろしくお願い致します」

主任は早く病院へ行きたいだろうに何度も頭を下げて出て行った。二人で事務室から見送ってドアを閉める。

「佐々木さんの奥さんって身体が弱いらしいです。変事があつたんだなって思ったら傍についていてほしくて。環さんには悪いことをしましたね」

「いいです。いつまでも新人でいるわけにはいきません。1回目の見回りはしましたし、私達でなんとかしましょう。それよりも烏帽子様にはご迷惑をおかけします」

守護してくれているとはいえ、事務の仕事を手伝ってもらっているのだ。主任が抜けたことで、力仕事は、烏帽子様がメインになってしまつ。

「…環さん、私が大学でどのような位置にいるか知らないでしょう？」

「へ？」

「私も一応は大学事務に籍を置いているんですよ？自分の仕事をす
るだけで迷惑と言うことはありませんよ」

「ええ！！先輩だったの！！」

神様の世話係というのも非現実的だが、神様が同僚というのはもっ
と非現実的だろう。

驚いた私を見て満足したのだろう。烏帽子様のにやりとした人の悪
い笑みを浮かべた。
悪い顔するの初めて見た。

戻ってきた別班に、事情を説明して、見回りに出る。

「暴れているわけでもないんだが、白衣の集団が黙々と正門へ向か
って歩いていてなあ。ちよつと不気味だったな」

戻ってきた先輩達が見回り中に見た注意人物を教えてください。
気をつけてと先輩達は疲労を滲ませていた。今回の見回りは、苦勞
したらしい。

「行きますよ」

昨日の昼、烏帽子様と通った屋台大通りは、全く様相を呈していた。

屋台の裏側から聞こえてくる嘔吐する音。酒瓶を持ってふらふら歩
いている男子学生。テントから聞こえる駆けつけ三杯コール。酔っ
払いに慣れていない私には何もかもが恐ろしい。さっきの、なんと
かしようという決意はあつという間にしぼんでいった。

尻込みをしていると、後ろからざっざっという何かが規則正しく歩
く音が聞こえる。

振り向けば、先輩達が教えてくれた不気味 白衣集団が歩いている

のが見えた。
知り合いと目が合ったらしい烏帽子様が会釈をしている。シユールな光景だ。

「さあ、背筋はちゃんと伸ばして。大学事務の監督する立場であることを忘れないください。私の後ろで怯えていたら余計に絡まれますよ」

後ろから肩を叩かれる。昨日は心強く支えてくれた手が、今は恐怖を煽るものでしかなかった。

「環さん、あそこに倒れている子がいますよ」

怯えを隠せない私に業を煮やした烏帽子様は後ろから見守っていますと言いつつ、指示を出してくる。おっとりしているくせに意外と人使いが荒い。

烏帽子様は、早く行けと言わんばかりにくるくると懐中電灯で倒れている学生を照らす。ええ、急かされなくとも行きますよ。小走りですよ。

「呼吸は正常ですね。ものすごく酒臭いです」

「寝ているだけですかね。一応保護しますか」

烏帽子様が寝ている学生に腕を差込み、肩に担ぐ。一輪車に乗せて毛布をかけてやる。

「戻ります」

「はい」

行き倒れの酔っ払いが多すぎる。いつも穏やかな烏帽子様が疲れを隠さないでいるくらいには、このやりとりは繰り返された。

所属がわかるようにサークル名・学科名が書かれた法被やつなぎやトレーナーを身につけるようにと指示が出ているため、身元確認は簡単だ。一度、事務で保護し異常を確認した後、引き取りにくるようにテントへ連絡を入れる。きゃっちあんどりりーすって主任は笑っていた。

「よっこいせ」

一輪車を持ち上げて、バランスをとりながら進む。

「烏帽子様、よっこいせはまだ若いんだから言わない方が」

「環さん、私は250歳くらいですよ。もう十分おじいちゃんなのです」

そつえば、阿君と200年一緒に暮らしたって言ってたな。見た目は若いのに。

「烏帽子様は江戸時代生まれなんですか？」

「そうですね。ウチを継いだのは、150年くらい前かなあ。あの頃は、開国だの何だので忙しなかったです」

懐かしがっているけれど、いろいろ突っ込みたい。

「ウチを継ぐ？」

「私は二代目ですよ。親が初代で、代替わりしたから。親は仕事で今まで神社からあまり離れられなかったから、キャンプングカー買って初代狛犬達と一緒に全国放浪の旅に出ています」

「…楽しそうですね。はは」

烏帽子様への神様としての敬意はもうなかったのだが、他の神族までありがたみが一挙に薄れてしまった。

「だいたい巡回ルートは見終わりましたから、この子が最後でいいでしょう。戻ったら交代しましょう」

大学事務室が入っている建物が見えてきた。

2回目の見回りに出たのが、11時半。終えたのが1時。別班の見回りが戻ってくれば今日の仕事は終わりだ。

保護していた酔っ払い達も順次引き取りが来ていた。

「お酒はほどほどにね」

「すみません」

と私達が連れてきた男子学生も頭を下げて自分でテントへ戻っていった。

喧騒の中から自分のホームベースに戻って来られてほっとした。

「おつかれ」

烏帽子様が入れてくれた本日2杯目のコーヒーをグビツと飲む。

遠くでロケット花火が鳴る音が聞こえた。…まだまだ気は抜けない。

6 山

「ただいま。はあー、疲れた」

事務室のドアが開く。別班が帰ってきたようだ。

「おかえりなさい。お疲れ様でした」

「おお、最後に一人連れてきた」

先輩が千鳥足の学生を隅に連れて行って座らせる。保護した学生を休ませるために、事務室の隅には備品の体操マットと毛布を敷いている。そこに学生はそのままくたつと身体が崩れて毛布の上に倒れこむ。ご他聞にもれず、彼も充分酒臭い。

「今日はこれで終わりだ。まあもう3時だし、だいたい静かになっていたよ。あとは朝まで鍵担当が残るだけなんだが、今日の当番誰だっけ？」

ホワイトボードに書かれた当番は、主任だった。

「あちゃー。しまったなあ」

「私が代わりますよ。佐々木さんには任せると言っておりますから」

「いいですか？いや、あとの2人は医療キャンパスから手伝いに来てもらっているし、俺は今夜もあるしで助かりますけど」

「構いませんよ」

「お疲れ様です」

話がまとまった瞬間に、巡回ジャンパーを脱ぎ片付けると、先輩達は素早く帰っていった。大変だったんだろうな。

私も帰ろうとすると、烏帽子様に止められた。

「女性の単独行動はダメです。送っていきます。眠いのなら、あちらのソファで休んでいてください」

なに、まだ帰れないのか。先輩達について正門から回っていけばよかった。

こうなった以上疲れているはずの烏帽子様を働かせて、一人休めない。泣く泣くカウンターに座った烏帽子様と並ぶ。

二人で見事な朝焼けを眺めて眠気を覚ましたりしながら朝5時を過ぎた頃だった。

「すみません、うちのテントで盗難があったようなんです。どうもうちの周辺は軒並みやられたみたいで…。今から、警察に届ける予定です。お手数ですが、一緒に来てもらえませんか？」
そう言つてとあるサークルの代表者が現れた。

寝入ってしまったテント当番の荷物を狙って置引きが発生することもあるらしい。悲しいことに、今年はそれが発生してしまったようだ。

警察立会いなら、やはり私より男性の烏帽子様のほうが何かと都合がいいだろう。なにより、代表者さんの目線は、私ではなく烏帽子様に向かっている。

先ほど奥で眠っている学生さんの様子も落ち着いているのが確認できたし、ここは私一人でも大丈夫だろう。烏帽子様も同様に考えたらしい。

「環さん、ここをお願いします」
ジャンバーを羽織って出かけていった。

うつんという唸り声が後ろから聞こえてきた。保護している学生がらだった。

身体をくの字に曲げて顔をお腹の方に伏せている状態だったので、呼吸を確認しようと顔を覗き込む。すると、うつすらと開いている目とあった。

「おはよう、起きた？」

と聞くつもりだったのだが、腕をぐいつと取られると抱き枕のように抱き込まれた。

その間、3秒くらいだったのではないだろうか。早業だ。

私と言えたことは

「へひゃ！！え？ちよ！！！」

だけだった。抵抗する前に足は絡められ、右腕一本で抱きしめられて身動きが取れない。もともと倒れこんだ状態でバランスも悪く、こんなことは初めてだったのでガツチリ固まってしまった。

彼は顔を私の胸にうずめてきて、一人で幸せそうだ。なんだか、女の子の名前を呟いている。

「人違い！！人違いだから！！放して！！！」

私のその声を聞いて、寝ぼけてぼんやりとした目が私の顔に焦点を合わせてきた。

視線があつた途端、びくつとして視線をまた下げて状況を確認しようとした。

そのとき、外から何かが走ってくる音が聞こえた。ぱたんとドアが開けば、烏帽子様だった。

あんなに恐ろしい顔をしている烏帽子様を見たのは後にも先にもあるときだけだった。今になれば振り返る余裕もあるが、その時は初めて襲われてテンパっている状態で、押し倒されているのを知り合

いに見られたのだ。
涙目になった。

それがなおさらまずかったのだろうか、

「何をしている!!」

同時にどおんと何かが爆発するような音が聞こえて窓ガラスを揺すった。

ビリビリと鳴るガラスには構わず、烏帽子様は走り寄ってきて私を男子学生の腕の中から助け出すと、背中側から蹴りを一発いれつつぶせにし取り押さえた。

「環!!大丈夫か!?!」

腰が抜けて座り込んでいるが、大丈夫と返せば

「とりあえず、話を聞きましょう」

烏帽子様の冷たい声が聞こえた。体重をかけ強く押さえ込んでいるようで、学生からは苦しそうなうめき声しか聞こえない。

先ほどまで朝日が差し込んできて明るくなっていた空が真つ暗なことに気がついた。よく見れば、この県のシンボルとも言えるお山さんが噴火しているのが見えた。さっき何かが爆発するような音はこれだったんだ。入道雲のようなもくもくとした噴煙があがっていたが、風向きがこちらだったようで天辺付近の噴煙が流れてきている。もう今日の大学祭は降灰のせいでじゃりじゃりだなと妙に冷静に考える。灰袋を用意しなくちゃいけないかな。

そんなことを考えていたら抜けていた腰も平気になった。

すっかり目が覚めた男子学生は、烏帽子様から解放されるなり私に向かつて土下座をしてきた。

「本当に申し訳ありませんでした。こんな朝早くから会ったって彼

女くらいで、髪形とか色が似てたから…。何を言っても許されないと思いますが、本当に申し訳ありません」
びじつとした綺麗な土下座だった。

「…もういいです。念のため彼女の名前を言ってください。あと貴方の学部名と名前を教えてください。次はないですよ」

彼が寝ぼけていった言葉でだいたいの事情は分かっていたのだ。あの時言った彼女の名前と彼が言う名前が合えば、嘘はないだろう。そして、合っていた。

「もう目が覚めたでしょう。帰りなさい」
押し出すように事務室から出て行かせる。ドアを閉じれば、その場にずるとしやがみこみたくなった。

でも、後ろに一人残っている。烏帽子様にちゃんとお礼を言わないと。

烏帽子様へ振り向くと、電話が鳴った。

「で、でます」

なぜか宣言してからとると主任からだった。

「タマさん！？烏帽子様に何があった？」

いや、烏帽子様には何もなかったですヨ。それにしてもこのタイミングでは主任も勘がいい。

はつきり言えば、あんなこと言いたくない。でも、報告しないわけにもいかないだろう。せめて直接報告しよう。

「…あとで報告したいことはありますが、烏帽子様には何もありませんでした。ご本人に代わりましょうか」

お、受話器むしりとられた。

「烏帽子です。はい。ええ。大丈夫です。すぐに治まります。心配させてしまい申し訳ありません」

がしゃり。乱暴に受話器が置かれた。烏帽子様がお怒りになってお

られる。男性と話す機会が全くなかった私としては、直接向けられた怒気ではないにしろ一緒にいるのは怖い。助けてもらっというてなんだけど。

はああああ。深いため息ですね。そうですね、疲れているところにご迷惑をおかけしてすみません。

「ああ、やってしまった…」
えらく落ち込んでいる。

「何を？」

じつと私を見つめてくる烏帽子様。何かついていますか。

「申し訳ない。約束したのに、守れませんでした」

「さっきの？あれは驚いたけど、襲うというよりも彼女への愛情行為だったせいかな、そんなに怖い思いはしなかったよ。心配しなくて大丈夫」

寝ぼけて勘違いされ抱きつかれたが、力強くも優しく抱きしめられて、そしてすぐ引き剥がされたから痴漢行為と感ずる暇がなかったのだ。知り合いに抱きつかれたと思えばいいだろう。二度としないでほしいけど。

「本当に？」

「本当」

思いつきりうなずいた私を見て、若干浮上したようだが、まだいつもと違う。

「まだなにかあるんですか？」

「ええ、自分の本業を忘れて山を噴火させてしまいました」

「お山さんのこと？でも、噴火なんてよくしてるよね」

「まあよくしてはいるのですが、今回は一歩間違うと大変だったんです。ウチはお山さんの神社です。私に何かあるとお山さんに異

変が出るのです」
だから、あの主任の電話だったのか。

あとで主任から聞いたのだが、活発な火山として有名なお山さんが、ここまでひどいのは久しぶりだったらしい。白い噴煙をあげるだけでしばらく大人しかったのにねえと言われた。

「環さん、ウチに来てても阿吽達を触ることに夢中で由来書とか読んでないでしょ。私にあまり興味がないですよね。こちらは好きな女の子が襲われてるのを見て、我を忘れるぐらいだったのに」
「ん？なんか変なこと言われた。聞き流したいけれど、烏帽子様がじつとこつちを見ている。」

「興味がないわけでもないですよ？あんまり突っ込んでいいのかわからないので、聞かないようにしているというかなんというか」
よし、さりげなく話を逸らそう。徹夜明けにこうい話題はきつい。頭回らないもの。

「環さん、私は……」
そんな私の無駄な努力を無視して烏帽子様は話を続けようとします。すると、がちやりとドアが開いた。

「おはようございます」
時間はちょうど7時。当番交代が来た。

「……おはようございます」
部屋に漂う緊張の残滓に気づかないまま先輩は話を続ける。

「あれー。主任じゃないんですか？」

「いろいろあります。昨日の鍵当番は烏帽子様になりました」

「へえ。じゃあ、その色々含めて引継ぎをお願いします」
烏帽子様が昨日の主任の件や事例を引継ぎしている間に、

「お先に失礼します」

ダッシュで逃げた。またこのパターンか。

小話

「烏帽子様、デリバリーピザしたことある？」

「ないですよ。そもそもウチには電話がないです」

「チラシが入ってたから食べたくなっただけ、女一人でピザをとるのは恥ずかしいので、ご一緒しませんか？」

烏帽子様にチラシを渡す。

「もしや、噂に聞くピザパですか！！」

「ピザパの略がピザパーティーならどこで噂になっているのか知りたいです」

「ミミにソーセージがついてる！！あ、チーズバージョンもありますよ。ハーフ&ハーフってなんですか？ピザ屋なのにお好み焼きの注文もOK！？どれにしましょう？」

「・・・好きなの頼んでいいよ」

烏帽子様大興奮で初ピザ注文。ジャンキーな食べ物も好き。

「烏帽子様、買った買った」

「何をですか？」

「じゃーん。阿・吽君用に、ブラシと散歩のリード」

近くのホームセンターのペットコーナーで見つけた品を献上する。

「…私も買いました」

そっと差し出されたのは、色形が全く一緒のものだった。

秋風が通り過ぎる。

「…えっと、えっと、私の方は壊れたときの予備にしよう!…」
「…そうしましょ!…」

あははははと変なテンションの2人。

「じゃ、じゃあ、早速件の散歩にでも行ってみますか。件、おいで
「はい、主様」

リードをつけようと首のあたりをこそこそ探る烏帽子様が固まる。

「どうしました?」

「首輪がないと使えないタイプでした…」

おバカさん2人。

環さんは反省して、ちゃんと烏帽子様に伺いを立ててからペット用品は買うようになりました。

5月に大学屋外プールにて白骨死体が発見され警察を呼ぶ騒ぎになる。

確認してもらったところ、備品番号1031と書かれており、大学祭中に行方不明になった骨格模型トミーと断定。

半年振りに教育学部保健体育科へ戻る。

新しいもの(マイク)がすでに購入済みでトミー倉庫入り。

大学祭の名残。

結構高かったのにと環さんお怒り

7 恋

烏帽子視点

「阿・吽よ。今日は誰も通してはいけないよ」

返事も聞かずに言い捨てて自分の住処に戻る。一人になりたい。

もともと寂れた神社だ。阿吽に言いつけはしたが、誰も来ないだろう。朝夕、様子を見に来る彼女がちらりと浮かんだが、その人に逃げられたからこそ、悩んでいるのだ。

しばらく避けられてしまう可能性を考えれば切なくなる。徹夜で仕事を終え、くたくたな身体は睡眠を欲していたが、頭は彼女のこととでいっぱいだ。眠れない。

そう、逃げられてしまった…。

動揺して口走ってしまったとはいえ、あんなことの後には告白しようとするなんてひどい男だと思われたらどうか。

昨日までの彼女は、決して自分のことを嫌っている様子はなかった。自惚れかもしれないが、自分と一緒にいるときは、いつも楽しそうに笑っていてくれたように思う。

本音と建前？

彼女が使い分けられるわけがない。

本人は至極まじめな顔でいるつもりらしいが、くるくる変わる表情は何を考えているか分かりやすい。

そこがよいのだけれども。

では、友人としてしか見られないということだろうか？

周辺の飲食店の情報交換や当たりだった店へ一緒に出かけたりしてきた。これは一般的にはデートと言っていていいだろう。彼女の趣味は美味しいものを食べることに。B級だろうが、イロモノだろうが、美味ければよしとする彼女の食への追求は他に類をみない。

近隣県で開催予定のB級グルメ大会へ誘われたときは、理由もなく担当地域から離れられないこの身体を恨めしく思ったものだ。

そんな彼女が、夕飯に誘ってくれるというのはかなり心を許してくれていると思っていた。

少年姿で接していたので、男としては考えたことはなかったようだが、一緒に学祭をまわった反応を見るに充分にその余地はある。顔を赤くして恥らう彼女はかわいかったな。

彼女とのデートで多少はしゃぎすぎてしまったのは否めないが、紳士的に振舞えたと思う。

周囲に男がいなかったと言っていたので、そこを踏まえつつももう少し違う立場へ発展させようと考えていたが、まだ早すぎたのかも知れない。その点は再検討しよう。

一番の問題点は、自分が神ということだろうか？

これまで人の子と友人となっても神ということが知られると距離を置かれることが多かった。彼女も初対面のときは、胡散臭そうな顔をしていた。

新しい世話係が来るときは大抵そんな表情をされるので、信じてもらいやすいように宙に浮くなどと分かりやすい演出をしているのだが、その後は一線を引かれてしまう。

しかし、彼女とは食という共通する趣味が分かり種族の垣根を越えてすぐに仲良くなれたし、わがままな阿にも頑固な咩ともうまく付き合ってくれているようだったので、このことは考えないようにしていたが…。

人族と神族。ふむ、避けていくわけにはいかないのか。相談に乗ってくれそうな経験者はいたかな…。

環視点

烏帽子様の告白もどきに答えないまま逃げて、寄せられた好意に気が持ちがぐるぐるして落ち着かない私が相談したのは、大学時代の友人だった。竹を割ったような性格で学生時代もよく相談に乗ってもらっていたものだ。仕事が終わったたろう頃に電話をかけてみれば、彼女はすぐに出てくれた。

そのうえで一連の出来事を話せば、逃げたのかと呆れられつつ彼女は切り込んできた。

「それで、その神様のことどう思っているのよ？」

「だってさ、今まで中学生くらいの子だったんだよ。敬語使ってかわいいなあと思っていたらさ、いきなりでかくなって、声もいい感じに低くなってて、いやでも男の人って意識させられた」

「ああ、あんたいい声の好きだもんね。ゼミも教授の声で決めたんだっけ」

「いやー、ちょっと変態みたいに言わないでよ。ちゃんと研究内容でも選びました」

若かりし頃といっても2年前の話を蒸し返されて赤面する。

「とにかく、そんな人が人ごみでぶつからないように先を歩いてくれたり、守りますとか言つてエスコートしてくれるわけよ。よくよく思い出せば、チビだったときも、遅くなったときは送ってくれずと女の子扱いしてくれてたのか。かと思えば、実験教室でめちやめちやはしゃいでかわいかったし。…なんかとにかく顔を見るたびきゅんつてする」

「あんだ、それ末期だよ。それで、好きってわかっていなかった方がすごいわ。両思いおめでとう」

「もしかして、私って烏帽子様のこと好きなの？でもさ、逃げちゃったよ」

「私に聞くなよ。そんだけ惚気てまだわかってないのか。あんたはその神様のことが好きで間違いないね。逃げたなら、謝ってくれば？」

「でもさ、なんかこつちの気象庁発表で火山性微動が増えているとかニュースで流れてるんだよね。これって怒ってるんじゃないのかな」

「でもさでもさつてうるさいのよ。どうせ、世話係なんですよ。すぐ会うじゃん。どつちにせよ、一度話さないと進まないでしょうよ。そつちの山って活発なことでも有名だし、気にしてないでさっさと行きなさいよ」

じゃねと電話は切れた。ツーツーという電子音を聞きながら、呆然とした。

友人の後押し？を受け、神社へ向かう。足はあまり進まず、少しでも顔を合わせるのを遅らせようとする。ガードレールに座ってなんどなく空を見上げれば、簡単に見つかる冬の星座が輝いていた。友人からばっさり断言されたが、実感が無い。本当に烏帽子様のこ

とを好きなんだろうかといまひとつ気持ちが悪くない。

冷たい空気を吸って、これまでを振り返ってみる。

出会って1ヶ月、ほとんど烏帽子様は子供の姿だった。それでも、一緒に過ごした時間は穏やかで、決して嫌ではなかった。一回り年の離れた弟みたいなものだと思っていたから、結構懐まで入れていた。

実の兄にまで色気がないと呆れられていたから、こんなに共通の趣味で盛り上がったのがうれしかった。

そりゃ、チビのときも咩君を散歩させながら車道側をさりげなく歩いたり、寒がったら上着を貸してくれたり優しいなと思っていたさ。冗談で私をもっと若かったらねえなんて言ったださ。

あちらが、逆にでかくなっただけだね。

大きくなった烏帽子様の目尻に出来る笑い皺しわを見たときや馬から降りるときに支えてくれた大きな手とかふとした折にドキドキさせられることもあった。それも認めよう。

お一人様結構な私だけど、初めて実家を離れて暮らすのは堪えていた。近くに家族も友人もない、そんな私に突然現れた烏帽子様という存在。

おはよう。いつてらっしゃい。がんばってね。おつかれさま。おかえりなさい。

穏やかな笑みと共に言われる言葉。私の心に空いた隙間に染み込んでいった。

烏帽子様の傍は心地よい。

好きなのかもしれない。

だいたい、あちらが私を好きというのは本当なんだろうか？なんだかそれらしいことを言われて含みを帯びた目でじっと見つめられたので、そんな風に思ってしまっただけで、勝手にのぼせて勘違いしてしまったただけなのではないか。だって、大学祭で遊んだときにも、友人に友達だって言っていたし。

え、何それ、恥ずかしい。勘違い？

…とにかく、逃げたことを謝るのだ。それ以上でもそれ以下でもない。

話を聞かずに逃げた私があればこれ憶測で悩んでも仕方がない。私の体温ですっかり温まったガードレールから立ち上がり、歩を進めた。

ぐだぐだ悩んでいたら、夜風で身体がすっかり冷えてしまった。荷物持ちさせたお礼ということでサツマイモの炊き込みご飯をタッパに詰めて持っていたが、それもすっかり冷めてしまっている。雑穀米と角切りサツマイモを出汁で炊き込み、カリカリに炒ったジヤコとごまを最後に混ぜた食感と香りを楽しむ一品。実家の家族も好きだと言ってくれる自信作。美味しいといってくれば重畳。謝りやすくなるってもんだ。

石段を登れば、狛犬達がいる。

「こんばんわ、烏帽子様はご在宅かしら？」

いつもは歓迎ムードなのに、今日は顔を見合わせて困った顔だ。

「こんばんわ。せつかくおいでいただいたのに申し訳ありませんが、今日は誰も通すなどの言いつけで、環様でも…」

「そう」

力なく言う。

「あの、環様」

「なあに、吽君」

「主様と何かありましたか？様子がおかしかったのです」

烏帽子様はやはり怒っているのかもしれない。もしかしたら、2度と…？

悪い方向へ考え始めればきりがない。冷たくなった指先を握りこむ。「まあちよつと。荷物を持ってもらったお礼に作ってきたからこれ渡しといてくれる？貴方達の分は蒸かして別の人に入れてあるからね。またお詫びに伺いますって伝えてくれると助かるわ。お願いね」わざと明るく言って踵を返す。

神社から自宅まで10分。学生街へ続くこの道は街灯が等間隔で並ぶ。

烏帽子様の都合上遠くへは行けないから、近所で遊び倒すために何度もこの道を通った。

この3週間、吽君を散歩させながら2人で歩いた。待ち合わせをしてわくわくしながら歩いた。

照れながら歩いた。

朝、弱い私がいらいらしながら仕事へ向かう道があつという間に変わった。

改めて烏帽子様の存在が私にとってどんなものだったかを感じる。

「なんだ。拒否されてから分かつても仕方ないじゃんねえ」

誰に求めるでもなく独り言は出てくるが、夜で人もいないと分かっているても涙は意地でこぼさないようにした。

さつき暖め続けたガードレールが見えてきた。家まであと半分つてところだ。

その横に置かれている自動販売機で、冷え切った身体を温めるためにHOT飲料を買う。一口飲んでは、カイロ代わりに両手で握る。レモンのすっぱさとはちみつの甘さがじんわり染みてくる。

やばいな。早く帰らないと堪え切れそうにない。身体は温まったけど、涙の方は逆に加速しそうだ。

上を見上げて瞬きを多くしてじっとしていたら、今、一番会いたい人の声がした。

「環!!」

さつき見つけてた星座がやっと滲まなくなったと思ったのに、一瞬にしてまた見えなくなった。

そのまま振り返れば、涙がこぼれてしまうので、袖でぐいっと拭いた。

夜だし、目が赤いのは気づかないでしょ。まあ拭いた動作でバレバレかもしれないが。

「こんばんわ、烏帽子様」

8 告白

走ってきたのだろう。息を切らしている。

後方からカツンカツン音がしてうるさいと思っていたのだが、下駄で走ってきた烏帽子様が出していたらしい。無性におかしい。

「下駄ですね」

「慌、てて、飛び、出して、きたから」

「鍵はかけてきた？」

どうでもいいことばかり聞いてしまう。

「ウチには、優、秀な、門番が、いるから、大丈夫」

息を整えた烏帽子様は私のちゃかしにもめげず、真っ直ぐ見つめてきた。

「環さん、話を聞いてほしいのだけれど、いいかな」

逃げないように牽制された気分。ついでに、肩をがっしり掴まれる。そんなことしなくてももう逃げないよ。

「環さん、私は、神で人とは違います。貴女からしたら面妖な力も持っています。色々制約もあつて遠くへは行けないですし、年はよく覚えてませんが、だいたい250歳のおじいちゃんでもあります。だから、貴女を楽しませることは出来ないかもしれません。今まで縁遠かったので、女心には疎いですし、実を言えばなぜ貴女が逃げてしまったのか分かっていません。それでも、私が神であっても、貴女が傍にいてくれたらと願ってしまいました。環さんが好きです。このまま一緒にいてくれませんか？」

「烏帽子様の穏やかな性格が好きです。にこにこ笑っている烏帽子様が好き。それと一緒に美味しいものを探したり食べたり作ったり、そんな時間を過ごすのも好き。私を送り出して迎え入れてくれる声が好き、笑ったときに目尻に出来る皺しわも大きくて暖かい手も、烏帽子様の全部が好きです」

私の肩の上で、小刻みに震えていた烏帽子様の手に手を重ねる。なんだか自分を否定ばかりしているけど、そんな烏帽子様が好きなのだ。好きという気持ちを伝えたい。

「正直、烏帽子様は私にとって神様という感じではないのです」
カレー鍋で絡み酒したときからね。

「今まで、友人だと思っていました。または弟のようなものだと。でも、おかしいんです。兄弟や友人なら、一緒にいてもドキドキしない。用事で会えなくても、あんなにがっかりしない。2度と会ってもらえないかもと思えば、胸が潰れるような気持ちになりました。朝は、逃げてしまっでごめんなさい。気づいたのはさっきですが、私は烏帽子様が好きです」

痛い、痛い、痛い。

好きですって言ったなら、抱きしめられてるけど、痛い。恥ずかしがる暇もなく痛い。

「本当ですか！？本当に？」

信じられないのか、聞いてくるけど痛い。

「本当。だけど、痛いから放して」

痛いと聞いて、がばりと身体がはなされる。けど、まだ肩は掴まれたままだ。

ちよ、目が怖いし。まだ続きがあるんだけど。

「あの、でもですね。まだ、結婚は早いと思うんです。まだ私達出会って1ヶ月じゃないですか？もっとお互いをよく知っていききたいと言っか…」

「へっ？結婚？」

あれ？さっきのはプロポーズかと思ったけど違うの？

「このまま一緒にいてくれませんかっつて…」

「えっ。ああ！！違います、いや、そうでもいいのですけれど、そうじゃなくて男女交際の方です」

男女交際って古めかしいな。

くしゅん。手の内のHOT飲料も温くなり夜風で冷え始めた頃、テレレな状態で浮かれていた私達は正気に戻った。

「このままここに居るわけにも行きませんね。送っていきますよ」
見慣れた苦笑いをして烏帽子様が自宅方向へ進み始める。

でも、私は進まない。

ついてこないことを不思議に思った烏帽子様が振り返る。
うつむいたまま無言で差し出す右手。

重なる右手。ついでに、上下に振られる。これは、いわゆる、握手ですね。

「…握手じゃない。左手、出して」

「ごめんなさい。はい、目的の左手です」

まだ私が何をしようとしているか分かっていない烏帽子様の左手に

右手を重ねる。そのまま横に並ぶ。

指と指を絡めて、カップルつなぎにしてやった。

「さあ、行きましょ」

何をされたか気づいて真っ赤になる烏帽子様に声をかける。あなたが進まないと私も進めませんよ。

家まで5分の道のりなのに、烏帽子様がゆっくりしか歩かないから今日はずいぶんかかる。

「烏帽子様、ご飯食べました？」

「今日は、ずっと環さんのことを考えていたから、食べていませんよ。ねえ、環さん」

烏帽子様が呼びかける。

「なんですか？」

「ねえ、なぜ、ずっと左側を見ているんですか？」

あなたを見るのが恥ずかしいからだよ。数分前の告白と調子に乗ってカップルつなぎもしちゃったから、いまさらになつて恥ずかしいんだよ。私の顔が赤いのを分かって言ってるあなたが、にまにまして嬉しそうなのも恥ずかしいんだよ。覗き込もうとするな。

「なんでもない。今日の献立は秋の味覚がテーマです。食べてく？」

「ええ、もひろん」

私の手で顔をそむけさせられた烏帽子様からはやや不明瞭な返事が聞こえた。

出会った頃は、こんなことになるとは思っていなかった。

下駄をカランコロン鳴らして、上機嫌で歩く神様。私はその横で嬉しいやらおかしいやら大変だ。

そんな私達を祝福するかのように、大学から花火が上がる。

「グラントファイナーレの花火が上がりましたね」

「花火まで!!」

「今年も無事に終わりましたね」

「すごい」

私のアパートに到着したので2階の廊下の柵にしがみついて身を乗り出す。烏帽子様が後ろからそっと支えてくれた。

「そんなに花火が好きなのですか？」

「この時期に見れるなんて思わないじゃないですか!!」

「では、また来年も見ましようね。実はウチからだと遮るものがないくていい場所なのです」

「はい!!」

返事をして気づいた。こうやって烏帽子様との思い出が増えていくんだ。

今回みたいに気持ちが悪くならず逃げてしまつことがあるだろう。それでも、烏帽子様なら受け止めてくれるような気がする。

ずっと傍にいたい。

強く願えば、分かっていますよと言わんばかりに烏帽子様が抱きしめてくれた。

大好きな私の神様、ずっと掴まえていてね。

小話2

「あれ、環さん、その指輪はどうされたのですか？」

烏帽子様が指摘してきたのは、右手にしているシンプルなゴールドの指輪のことだろう。

「これ？実は、以前好きなファンタジー小説が映画化されて、その小道具の指輪が素敵で、似たようなものを探してたの。やっと見つけてたんだ」

「へえ、なんだか結婚指輪みたいなデザインですね」

「映画の中では、熱すると飾り文字のような文字が浮かび上がるんだけど、さすがにそこまでの再現は諦めた」

「・・・指輪を捨てる辛く長い旅に出かける予定がきちやいますよ？」

「いとしいしと」

「っ、環さん！！なぜ彼の真似を！？そのものまねの需要はないと思いますよ」

「ハリーポッターに手を出すな！！」

「似てますけど、なぜその路線でいくんですか。プルプルしながら人差し指を伸ばしてこない！！」

環さんのものまね持ちネタ3人物。映画好き。

一応、架空の世界としているので、映画ネタはどうかと思い没にしたのですが、小話の中で一番好きだったので復活させました。

「烏帽子様って美味しいもの好きだよね」

「ええ、幸せになれます」

「確かにね。でも、定食屋の裏メニューまで網羅しているのはすごいよね。何か好きになるきっかけがあったの？」

「……ウチの母の作るご飯はですね、ちよつと口では言い表せないくらいすごいのですよ」

烏帽子様、目が虚ろですね。

「代替わりするまで100年その味で過ごしたのですけれど、初めて外食したときの衝撃が忘れられないです。人ってすごいと思いましたが」

あんた神様やん。

烏帽子母は、飯まず。

息子は成長するまで母の味しか知らず、それが普通とっていた。反動で、ご飯にこだわるようになりました。

「タマさん、太った？」

主任の一言に凍りつく。先週、無事に第1子が生まれ、浮かれっぱなしの上司は空気を読むスキルをどこかに置き忘れてきたらしい。

…確かに、確かに2kg増えたよ？美味しいものいっぱいあるし。

烏帽子様が、美味しいお店にばっかり連れて行くからだよね。

「烏帽子様のせいです」

「え、でも、烏帽子様は太ってないよね」

主任の的確な指摘にさらに固まる。

…確かに、太ってない。私だけ！？

烏帽子様には神様特典ついてるよ。

同じように食べてると太ります。

「8周目〜。はいはい、足上げて〜」

はあはあはあはあ

テケテケテケテケ

「9周目〜。スピード落ちてるよ〜」

ぜはーぜはーぜはー

テケテケテケテケ

「はい、ラスト〜。ダツシユで」

くっ、普段はあんなにかわいいのに!!

「おに〜!!」

ダイエツト環さん。付き合いで、テケテケ足音は咩君。周回数のお知らせは阿君。

神社の境内にて。

「烏帽子様、ちゅ」

振り向くと同時にほっぺにキスを試してみた。

「…環さん、そんなことする人だったんですね」

真っ赤になってしゃがみこむ烏帽子様を見下ろす。

「そんなことする人だったんですよ。でも、もうしません」

窓の外を見れば、また山が噴火していた。風下方面の灰掃除大変だもの。

「えっ、いや、いきなりだったからびっくりしただけで、え、もう今後一切しないの？」

慌てる神様はかわいい。

「ねえ」

かわいい。

ほのぼのバカップル。

小話2（後書き）

思っていたよりも、読んでくださる方が多く、ありがたいことに日間完結済ランキングで1位になりました。

嬉しくて、おまけ小話を書いてしまいました。

2人の物語にお付き合いいただき、ありがとうございました。

11月15日より、烏帽子様視点始めました。よろしければ、こちらもどうぞ。

イ 事務員

花火に興奮し、夕飯を食べた環さんは、そろそろ眠そうだ。

秋の味覚がテーマと豪語していただけあって、サツマイモの炊き込みご飯とそれは見事に脂の乗った秋刀魚と箸休めにきのこの煮浸し、最後に豚汁をつけてくれた。

生姜がきいたとても美味しい豚汁で、夜風で冷え切った身体がよく温まった。

環さんの作るものは何でも美味しい。

いつも結構宵っ張りなんだよと言っている環さんが、まだ22時にもならないうちにうつらうつらしているのを不思議に思って尋ねてみれば、なんでも朝、帰宅してから眠らずに考えていたらしい。

ずっと自分のことを考えていてくれたと聞けば嬉しいが、昨日からほぼ1日半寝ていないことになる。それはいけない。

「そろそろお暇しますね」

1Kの環さんの家は、脱衣所がない。

このままここにいれば、寝る準備をしようにも風呂に入れず環さんが困ってしまう。

いつもならご馳走になったお礼に食器を洗うくらいするのだが、早く帰らねば、そのまま眠ってしまいそうだ。

玄関が狭い。

ヒールのある靴を見ると女の子の部屋だと思う。

履いてきた下駄に足を通す。鼻緒の色が一緒だ。左右バラバラじゃ

なくてよかった。

また環さんが下駄を履いた自分を見て笑っている。なぜだろう？
笑っている彼女がかわいいから深くは考えない。

力を使えば、環さんの部屋からウチへはすぐだ。

しかし、今日は環さんと手をつないで歩いた道をのんびり帰りたい。
た。

彼女と手をつないだ左手をポケットに入れてぎゅっと握る。

まさか人から距離を置かれる自分が彼女を手に入れられるとは思っ
ていなかった。

傍にいてくれるって、一緒に居てくれるってうなずいてくれた。

ふふ。環さんを初めて見たときを思い出す。あれからそんなに時間
は経っていないはずなのに、本当に長かったなあ。

環さんはきつと知らないだろうな。

あれは、確かサークルの勧誘机が大通りから減ってきた頃だったか
ら、5月の半ばくらいか？

全学生が選択してとる共通カリキュラム講義はなかなか面白いもの
が多い。

専門的な知識を必要とする学部講義とは違って、分野が幅広いし、

なにより学生が全学部から集まるから面白い人が多い。神である自分に面白い扱いされるのは、不満に思う人も居るだろうが、全国から集まればやはり変人もいる。

自分は、担当地域から動けないから、遠くの話聞けるのは楽しい。他に聞けるとすれば、10月の出雲大会議のときだけだ。それを目的として大学にもぐりこんだわけではなかったが、嬉しい副産物として受け取っている。

環さんを見るきっかけになった講義も昨年仲良くなった友人がいて、誘われたからふらりと入ってみただけだった。

1度受けると決めた講義はどんなにつまらなくても最後まで受ける決めていたが、それは5時限目の最終講義で、他の学生達はすっかりだらけていて、内容も人もすこし期待はずれだったとがっかりしていた。

あんまり暇だったから、その教室にある横から大胆に中綿を飛び出させながらも現役で働き続ける黒板消しがなぜ交換されないのか考えていたくらいだ。

限界は突然来た。

あれは断じて自分のせいではない。直前までじっと見つめていたものが壊れることなんて今までなかった。

とにかく、1つしかない中綿飛び出し黒板消しがとうとう壊れたのだ。

講義終了まであと10分で、だらけきった学生を前にして、教授も帰りたかったのだろう。

切り上げることになった。

帰り支度を整えて教室を出る前に、教授は、事務課に内線をかけて新しい黒板消しを持ってくるように連絡していた。

その教室は事務室の真上だったので、連絡を受けた事務員はすぐにやってきた。

知らない人だったので、やって来た事務員が新人だと分かった。見るからに初々しい入りたての雰囲気がある娘だなと思った。

もうその部屋には、自分を含めた2、3人しか残っておらず、新人事務員も黒板消しを置いたらすぐ事務室に戻ら思っていた。

予想に反して、事務員はまだ板書された状態の黒板を見ると綺麗に消し、黒板周りのチョーク粉や、黒板消しクリーナーの中に詰まった粉を持ってきた袋に集め始めた。

なぜか黒板周りは大学が入れている清掃業者の担当区分ではない。もちろん教授も学生も手をつけないので、チョークの粉が層となり、厚みをなしてひどいことになっている。

事務の仕事ではないのに掃除をしている彼女を見て、今年になって、何度か黒板周りが綺麗になっていた教室を見たのはこういうことだったのかと納得した。

こういう事務員なら日中留守にしがちな自分の神社の世話を任せてもいいなと思った。

しかし、当時の世話係である佐々木氏に別段不満があるわけでもない。

年1でウチにシロアリ駆除点検とか入れてくれるし、むしろ自分では気づかないことを世話してくれるので助かっているくらいだ。いきなり、彼女を世話係にと言っても、今までしっかりしてくれていた佐々木氏に対して悪い。

そのときはまだ保留にしておこうと思っ、彼女の顔だけしっかり

覚えた。

そのあと、環さんを見たのは学食だったかな。

今日は何を食べようか。今月はヨーロツパフェアだ。入り口にヨーロツパ地方の地図が貼られ、さらに国名の下にも料理の写真が貼られている。日替わりで変わる写真もあるので油断できない。毎日確認しないと、見落とす。

お盆を取って好きな物を取っていくセルフ方式だが、お昼時は混雑していて悩む暇を与えてくれない。

せっかく写真があつて全容が分かるようになっていたのだから、フェア料理を食べるときは、最初に決めてからにしている。

英がない。1度、噂を試してみたいのだが、まだ真相は闇の中。母とどちらが上だろうか？

色々迷つたが、スライスチーズの上にトマトソースがかかったイタリアンハンバーグにしよう。

これを伊料理と言ったら、伊の人は怒ると思うが、まあ安く早く大量に提供してくれる学食業者さんが考えて作っているのだから、文

句は言えない。大抵、美味しいし。伊料理でナポリタン出してないだけ、今回はましかもしれない。

入り口で、ずっと写真を眺め回しては、邪魔になるので決まったらさっさと移動する。

無事にハンバーグを手に入れて、次は席を手に入れようと辺りを見回すと、名も知らぬ事務員を再び見つけた。

空いている席がまだあるのにいきなり隣に座るなんて、変人だと思われる。

ちょうどいくつか隣の彼女が見える席が空いていたので、急いで向かう。無事に座れた。

彼女は何を食べているんだろう。

ちらりと見るが、私が入り口で悩んでいる間に、ほとんど食べてしまったようで、もうメインはなく判別がつかない。

しかし、美味しいものを食べていたのだなと彼女のここにご顔で分かる。

美味しいものを食べると幸せになると持論があつたが、美味しいものを食べた人を見ても幸せになれるのだな。いいなあ。

決めた。うん、彼女がいい。

しかし、勝手にだけけれど環さんを世話係にと決めてからが長かった。

佐々木氏がよくしてくれている分、すごく言い出しにくい。

そうこうしているうちに、入梅してしまった。

この季節は長生きしていても好きになれない。仕事が増えるからだ。まず担当地域の点検箇所が増える。それに、大学も契約しているのが、県内に点在している大学施設の異常も気をつけているが、所在が山奥だったり実習先の農家だったり、雨が降ると気をつけることがどつと増えるのだ。ああ、気が抜けない。

無事に梅雨明けしたかと思えば、今度は、事務が期末試験やそれに伴う学生の成績管理等の時期に入ってしまった。

やっと8月になれば、なんと佐々木氏がスクーターで事故をして骨折したとの一報を受けた。

大学病院だったのでなんとかお見舞いに行き無事を確認できたけれど、足の骨折で来月まで入院すること。

キャンパス見学の準備とかあったのに、自分がいなくなったから、事務室のみんなが夏休みとれなくなっちゃったみたいなんだなんて言われれば、一体誰が、世話係の話ができるだろうか。

佐々木氏が大学に戻ってきてても、彼は入院していた分仕事が溜まっ
ていて、より一層忙しそうだ。

このままでは1年過ぎても彼女は私の元に来てくれないかもしれないかもしれない。

9月も終わる頃に、思い切って話そうとしたら、逆に佐々木氏から

言われた。

「私、勤務年数的に来年から別キャンパスに異動の可能性があるので、後任決めちゃいました。今年入った一押し新人がいるので、来週連れて来ます。烏帽子様と話が合うと思いますよ」

…今まで私は何をしてきたのだ。佐々木氏はこういう人だって知ってただろう…。

12年世話係をしてくれた佐々木氏がいなくなってしまいかもしれないのは寂しいが、移動先が別キャンパスならまた会う機会もあるだろう。

とにかく、彼女が来る！！

そうそう、あの時は、環さんが来るといふことに浮かれて、うっかりしていたのですよね。

佐々木氏が来週連れてくるって言うていたことに。

小話3

「なあ、最近さ、烏帽子様、女の人とよく歩いてないか？」

「あ、俺も見た。栗色の髪の人だろ」

「俺、よく行く定食屋で見かけるんだけど、なんかめっちゃまそつに飯食ってるぞ」

「…思い返せば、俺もつまいて評判の飯屋の近くでよく見る気がする」

「なんだ、飯友じゃん」

「だな、あの烏帽子様に彼女なんてないな」

「なー」

学生目撃談。

環さん2kg増の裏側

「佐々木主任、なんだかご機嫌ですね」

「いや、タマさん。いじりがある人って楽しいよねえ」

「そうですね」

伊 事務員で烏帽子様に後任に環さんを連れてくると言ったあとの主任。

10月からはわざとでした。環さんは主任と性格が若干似ています。

「ああ、炬燵を出したのですね」

遊びに来た烏帽子様が、一昨日出した炬燵に気がつく。

「最近、寒くなってきたからね、思いきって出しちゃった。あれ？」

お茶を用意して振り向くと烏帽子様が消えていた。

何事かあっても、私といるときはいつも断ってからいなくなるのに、

おかしい。

「烏帽子様？」

「はい」

返事はあるけど、姿が見えず。

「どっ？」

「ここです」

炬燵から手が生えた。

キッチンの反対側から炬燵に潜っていて見えなかったようだ。

「冬限定生物コタツムリです」

誇らしげに言われても…。

子供か！？いや、子供じゃないからあんなことになっているんだな。
ちやーんす。

炬燵の上に、用意したお茶を乗せて、目に付いたコタツムリの弱点
を攻撃する。

「うひゃー！うひゃひゃ、環さん、や、やめて。ひゃ」

烏帽子様は、だいたい176cmくらい。環さんは157cmくら

い。

炬燵に潜っても反対側から足の先が出ていました。

口 気持ち

10月になると出雲に出張しなくてはいけないので、私はいないのです。

そのことを伝えても、環さんとの初対面は動かず10月。それでも、出雲大会議は絶対に外せないので、泣く泣く、恒例のお留守番を置いていくことになった。

仕方がない。今後の1年を決める出雲大会議サボったら、大御所様方になんと言われるか。恐ろしい。

しかし、どの会議もまじめに話し合いをしても、結局、最後には、お酒飲んで宴会に突入。

特に山神定例報告会などは偉い方達ばかりで、こちらを気にかけてくださるけれど、2代目としては肩身が狭い。

全国に散っている知り合いに会える機会はこの大会議でしかないのだ、本来なら、地酒持ち寄りで楽しく宴会に参加するが、そんな気分になれないのは、置いてきた留守番からの報告が毎晩届くからだ。

自分を幾分か分けて作る留守番は、神社の前にある大学附属中学校に通う子らを観察して作った。

実際の自分との年齢差から、お父さんと呼びたがるのをなんとかお兄さんであると言い含めることに成功したが、そのちびすけが、生意気なことに環さんとデートしているのだ。

自分の人格なのでちびすけの意識とつながっているが、間に一枚の布を挟んで彼女と接しているようですつきりしない。嬉しそうに報告してくるちびすけにいらっと来ることの方が多い。

ああ、いけない。心穏やかにしていないと、お山さんの方に影響が出てしまう。

はあ、早く帰りたい。

そう望んでも時間は平等に流れて、会議、宴会、会議、宴会、宴会、宴会の日々は1ヶ月続いた。

「では、また来年会おうぞ。みな、息災でな」

やっと刀自様じとが最後に締め言葉の言葉を述べると、早速帰宅組が机の下にまとめて置いた荷物を取りだす。

いつもなら、このあとにひらかれるお別れ会に参加して、明日ゆっくり帰るのだが、今回は、それには出ない。

なぜなら、明日は大学祭。ちびすけが環さんと約束をしたそうだ。1年に1度の旅行気分を味わうためにJR移動をいつもしていた自分だが、今度の大会議ほど早く帰りたいことはない。力を使い、シユツと帰る。

「本当に31日に帰ってきたんですね。兄さん」

ええ、帰ってきましたよ。明日は、大学祭でしょう。

「留守番ご苦労様でした」

しばらくすると、テコテコ足音がした。

「主様、お帰りなさい」

「はい、ただいま」

ああ、ウチは落ち着く。

扉を開ければ、妙に毛艶を増した阿・吽がそこにいた。

「…誰が、ブラッシングしてくれたのですか？」

阿のたてがみのもふもふ具合も、吽のしっぽの巻き加減もよい感じではないですか。

その仕事具合に、彼女の影を見る。

「環さんです。主様とは違う手つきですごく気持ちいいんです」

うっとりしながらの阿の返事にやはりと思いつつも、心が抉られた仕事で疲れて帰ってきた飼い主にそんなこと言っではいけない。

「お前とは2000年一緒に暮らしてきたのに…。そんなに環さんがいいなら、環さんちの子になっちゃいなさい」

「それ、お留守番の烏帽子様も言っていましたよ」

私がちびすけの記憶を共有しているように、私の記憶や経験もちびすけと共有している。だから、同じことを言ってもおかしくはないが、吽よ、冷静に言うのはやめなさい。

もう留守番は必要ないので、ちびすけを元に戻す。

「ご苦労様でした」

記憶を共有できるが、この1ヶ月、全て覗いてきたわけではない。ちびすけを元に戻せば、どうせ一体化するのだし。しかし、そのことを少し後悔した。ちびすけは、だいぶ端折って報告をしていたようだ。

「何も無いように守りますからって…。最近の子は、すごいことを言いますね」

いや、最近の子も何も言ったのは自分なのだけれど、ちびすけという布越しだから、観客席から見ているようで突っ込みを入れてしま
う。
言われたときの環さんの照れたような顔も見えた。

「主様、顔が赤いですよ。久方ぶりの風邪ですか？大事な御身です
し、明日は、無理をせずにお留守番の烏帽子様に行っていただいて
は？」

はて、顔が赤い？どうしてだろう。

「具合は悪くないですよ。心配せずとも大丈夫です」
むしろ、明日が楽しみで、いまだかつてないほど絶好調だ。…眠れ
るかな？

あの時は、まだ環さんのことが好きになっているって気づいてなか
ったのですよねえ。

確か、環さんという人に興味があっってお話したいと思っていたよう
な。

……どれだけ鈍いでしょう。今、振り返ると、我が事ながら気持
ち悪い気がします。同じなのにちびすけの方が、気持ちを分かって
いた気配がありますし。

さて、環さんへの恋心を自覚したのは、大学祭初日でしたかね。

連日連夜の会議と宴会で疲れていたので、心配した睡眠はしっかり取れた。

環さんとの約束は11時。30分前から鳥居の前で待ってしまった。時間が近づくとつれそわそわする。

しかし、環さんが来たと思ったら、素通りされた。いや、会釈はされたけれども。

なぜ、そんなに他人行儀？この1ヶ月でかなり仲良くしていたはずなのに。

いやいや、とりあえず、環さんは来たのだから、声をかけよう。

「おはようございます。環さん」

なぜそんなに私の顔を見つめるのでしょうか？眉間に皺を寄せなくてもいいじゃないですか。

「おはようございます」

あ、返事来た。それだけで、嬉しくなる。

「今日は楽しみましょうね。とりあえず、おススメの留学生屋台に最初に行きましょうか」

眉間の皺がいよいよ深くなりましたね。あ、何かに気がついたようです。

「もしかすると、烏帽子様のご家族ですか？」

「え？いやだなあ、環さん。烏帽子ですよ」

「え？」

どうして、そんなに不思議そうなのでしょう。

「環様、この方は主様で間違いありません」

そうそう。間違いないです。件の言葉にうなずく。

「主様も、普通はいきなり成長したら別人だと思われるのですよ。しっかり環様に説明してあげてください」

え、人って気配でわからないの？

説明したら、環さんは緊張し始めた。

いきなり敬語になった…。ちびすけと中身一緒だし、緊張しないでいいのに。

自分が烏帽子だと納得してもらえたようなので、大学まで歩き始める。

ずっと中身は一緒って繰り返しているけれど、大丈夫だろうか？

屋台通りは例年通りものすごい混雑だ。

環さんがぶつかっただらかわいそうだな。先を歩こう。

「あ、烏帽子様だ。彼女ですか？」

知り合いから声をかけられる。この子からも食券もらっていたなあ。

「違いますよ。友達です。またあとで来ますね」

ふふ、友達、友達ですよ。やっとやっと仲良くなれたのです。

浮かれながらも注意を払った甲斐あって、環さんは誰にもぶつからないで済んだようだ。

目的の広場に着き、昨年、出店していた場所を見る。今年はどうやら中華がメインのようで、数年前に食べた中華ちまきを思い出す。よし、今年は当たり年だ。

「美味しい!!」

環さんが、びっくりしている。

そうでしょう、そうでしょう。ここは、特に中華はほぼ外れがない
素敵な屋台です。さすが3大美食国家。

「でしょう！また学祭期間限定なのが憎らしいのですよ」

また環さんが美味しいものを食べてにこにこしているのを見て幸せ
な気持ちに浸る。

「いや、それを言わないで」

「それもまた来年の楽しみですけどね」

言葉遣いも元に戻った。いっぱい屋台に行つて、環さんのにこにこ
顔を見せてもらおう。

… 食べ過ぎた。さすがに、6連続屋台は食べ過ぎた。環さんのにこ
にこ顔見たさにまわり過ぎた。

その後は反省して、屋台以外にもまわつてみる。

環さんには特に農産市場が喜んでもらえた。

市場から買い終わつてこちらに来た彼女の両側からさがっている袋
を持つ。

そしたら、環さんが慌て出した。

私でも肩が抜けそうな重さの2袋。そして、私の足元に、葉物野菜
が入った袋が1袋と卵が入った小袋が1袋。

… 環さん、コレ一人で持つつもりだったのですか！？

環さんにこんな重いもの持たせて、1人手ぶらなんてできるわけが
ない。

遠慮する環さんから強引に袋を奪って抱える。

そろそろ日がかげってきた。暗くなる前に送っていこう。

「そろそろ帰りましょうか」

まだ環さんといいたいなあ。

自分で帰ろうと言ったのに、反射的にそう考えてしまっただけで驚いた。今まで友人といっても別れるときにまだ一緒にいたいと考えたことがなかった。

そのことについて考えながら、ゆっくりと足を進める。

「そろそろ見回りの集合時間ですね」

環さんが不安そうな顔をしている。

「明日はちゃんと守りますから大丈夫ですよ」

契約は関係ない。

信頼してほしい。悲しい顔をさせたくない。笑っていて。

昨日まで布越しだった気持ちが勝手に溢れてくる。

しかし、環さんから返事はなくて。だから、もう一度。

「大丈夫ですよ」

安心してください。貴女を守らせて。

また溢れてきた。この突然、心を満たし始めた気持ちを込めて自分より小さな肩をポンッと叩く。

いつの間にかアパートの前に着いた。ドアを開けてもらい、荷物を入れる。黙ったままの、それでも不安な表情が消えた環さんから何かを渡される。

受け取った瞬間に

「あ、これ阿・咩君にお土産です。畜産科特製ジャーキーです。塩

分控えめに作ったって言うてました。今日はありがとございまして」

逃げるように環さんは家に入って行った。

名残惜しいが、今日はおしまい。また明日。しばらく、環さんの家のドアを見つめて、ウチに戻る。

することができた。

先ほどの、溢れ出した気持ち。

するりとなくなりそうで、確かにそこにあるのに形ははっきりしない。

それでも心の中を明るく照らし出す、この気持ちを今から捕まえに行かなくては。

逃がしてはならない。

小話4

「佐々木さん、あれは、わざとだったのでしょうか」

「タマさんのこと?」

「そうですね。10月に連れてきたのは、わざとなのでしょう」

「だって、6月くらいからだっけ?なんか言いたそうにしてるけど、言わないし。そのくせ、今まで興味なかった新人さんの話題ばかりふってくるんだもん。バレバレですよ」

バレバレだったって。烏帽子様。

本編終了後の一幕

ちびすけの報告例

1 神様から

「ねえ、兄さん」

「なんですか?」

「今日は環さんとカレー鍋をしました。環さんは男爵です」

意味がわからない。環さんに髭は生えていない。詳しく聞くこうにも、ちびすけ酔っているし。

いちいち聞き出すのも面倒なので、ちびすけの記憶を覗いてみた。

……ちびすけよ、兄さんはなんか納得がいかない。

兄さんは初めて見てからだいぶ経っているのに、ちびすけは会って

2日目で夕飯にお呼ばれするなんて。
兄さん、一生懸命働いているのに。
「…ちゃんと明日お礼を言っておきなさいね?」

2 狛犬から

「ねえ、兄さん」
「なんですか?」

「今日は、環さんが神社の草むしりに来てくれました」
あ、しまった。最近、ウチの周りのことするのをすっかり忘れていた。大変だったでしょうに。

「阿吽が懐いて、これから夕方遅くなったときは送ることになりました。よかったですよね?」

阿・吽、ちびすけ、GJ!!

最近、友人に教えてもらったGJの使い方が、ばっちりわかりました。

「ええ!!女性の一歩きは危ないですからね」

3 約束から

「ねえ、兄さん」
「なんですか?」

「今日は、環さんと大学祭に行く約束をしました。初日です。兄さんはいつも出雲大会議から1日に帰ってくるみたいだから、私が行ってもいいでしょう?」

「31日に帰ります。大学祭の約束は、兄さんが行きます」

「あの、小さい方の烏帽子様って、結局分身なの？いまいち、わかないんだけど」

「うーん。説明が難しいですね。細胞分裂の途中で止めた状態？どちらも私だけけど、別々に動くという風に理解していただければ」

「あ、こういうこと？」

環さんがおもむろに親指と人差し指で輪をつくり、頬に当てる。

「これは、たこやきっ！！と言いながらする技なんだけど、この輪つかの部分が烏帽子様の力で、たこ焼きの具の部分が小さい烏帽子様ということでもいい？」

「まあ、そのようなものですかねえ？その具の部分がしゃべって動けるなら、それに近いかもしれません」

「私は、1ヶ月、たこ焼きと話してたのねえ」

「それは違います」

ちび烏帽子に関して無理やり作った設定

わかりやすくしようとしたら、食べ物にいつてしまいました

八 自覚

この街は、火山が近いせいで温泉が多い。
実はこの大学にも、温泉がある。

だいぶ前に、理工学部が実習で1度ボーリング調査をしたのだ。機材をどう調達したのか詳しくは知らないが、建築科と地球地質学科とが一緒に行つた大掛かりなもので、空いている大学敷地の隅を穿つてみた。

面白そ……いや、危険があつてはいけなないと見に行つたら、温泉がポソッと湧き出た。

温泉に入りたくないなあ。湧けばいいのにと直前に思っていたことは、誰にも言えていない。

とにかく、温泉が湧いた。

大学側は、その扱いに困つたが無駄にするのもという話になり、温泉施設が作られた。

温泉宿のように豪華ではないが、40 くらいの程よい温度で、手触りはさらりとしていて、湯量も豊富。入りたいと思つた手前、試してみれば、手足を伸ばしてゆっくり浸かれるのが気に入り、毎日行くようになった。

今日も入りに来た。

毎年、大学祭期間中は、一番近くにある温泉として重宝され芋洗いのごとく混雑するのだが、今は夕飯時のせいか人が少ない。
いつもの定位置につくことができた。

ぼーっと何も考えずに一日の疲れを癒す時間が今日は違った。

先ほどのアレはなんだ？

生まれてこのかた感じたことがない。

まだ一緒にいたい。

信頼してほしい。悲しい顔をさせたくない。笑っていて。

安心してください。貴女を守らせて。

それらを全部まとめたような、あとからあとから溢れ出してきて止まらない気持ち。

……心を満たすこの気持ちの名前は？

手をお椀にして、浴槽のお湯をすくいとってみる。指の隙間からこぼれていく。

しまいには、なくなってしまった。

まるで水のような、そこにあるのに掴めない気持ち。

早く捕まえないと消えてしまいそうで、焦る。

今、頭の中には彼女しかない。

初めてだ、こんなこと。

…本当に初めてか？本当はいつからだ？

よく思い出せ。いつから彼女のことを考えていた？

今日はいわずもがな。朝から彼女のことしか考えていないことに愕然とする。

10月はもう大会議より彼女だった。

9月は？1年経つても彼女が私の元に来ないかもと焦っていた覚えがある。

8月？では、7月？それとも、6月か？

5月の…彼女を学食で見た日から、だ。

私は、彼女が幸せそうに笑っているのを見たときから、彼女に夢中なんだ。

彼女がいい。

あのととき、そう思ったじゃないか。

唐突に、理解した。この気持ちの名前は、恋だ。

私は、環さんに恋をしているんだ。

初めての事態に、地に足がつかない。

洗面道具一式を持ち、ウチへ帰る。

ウチの石段を踏み外すなんてことしたことがなかったのに、転んだ。大きな声も出てしまったが、それより阿・吽の目の前で転んだので、ものすごく驚かれて、いたたまれない。

「うはあ！！」

「主様！？」「

…なんでもない」

まだなにか言いたそうな阿・吽をなんでもないで押し切って、中に入る。

入り口脇に置いておいた環さんへのお土産を見つける。

荷物になるからと帰りに渡す予定だった出雲のお土産。農産市場で買い物をしている環さんを見たときに、あとで届けようと思っていた。

まだそこまで遅くない時間だから、本当なら届けてもよいのだが…。
明日、渡そう。

……明日。

今まで、どんな顔をして会っていたのだろう。わからない。

彼女はこう思っているのだろう。

自覚はしていなかったが、自分は約半年好きでいたらしい。知り合
って、彼女はまだ1ヶ月で、自分のことをどう思っているのだろう。
そのことが気にかかる。

今朝は、今まで周囲に男がいなかったと言っていた。

そんな彼女には焦って迫るよりゆっくり距離を縮める方がいいだろ
う。

この1ヶ月、仕事帰りに阿吽に会いに来てくれて送っていくついで
にご飯も食べに行つて、1番心を許してもらっているのではないか？

そこまで考えて、自分が彼女を手に入れようとしていることに気づ
く。

彼女が笑う横にいたい。傍にいたい。きつと1番幸せを感じる場所
がそこなのだ。

いつかは。いつかはその場所にいられるだろうか。

布団に入って、そんなことを考えていたら、眠ってしまった。
起きたら、もう明日になってしまった！！

今日は彼女と佐々木氏と見回りをするのだ。どんな顔、どんな顔と

焦ったが、待ち合わせ場所に行けば、環さんが自分以上に切羽詰まった顔をしているのを見て冷静になる。

いやに佐々木氏がにやにやしているが、気合を入れた。

夜間大学祭は、例年通りだった。途中、佐々木氏が帰るといふ突発事態もあつたが、怯えていたわりには彼女も頑張ってくれて、救急車を呼ぶようなことはなく済んだ。

ただ警察は呼んだ。

「こんな時間にすみません、よろしくお願いします」

普段は車両が入れないように制限している門を、開ける。

事情を聞かれるのは被害があつたサークルの子達で、こちらも、事情聴取が終わつた子から順次報告書を作るために事情や名前を控える。

被害は共通棟の間のテントに軒並み集中していて、カメラだの屋台のお釣りに用意していた小銭だのいろいろあり、事情聴取が終わるのは1時間半くらいかかった。

「どうもお手数をおかけしました」
本当にお疲れ様です。

最後の警察車両を見送り門扉を閉めて事務室に戻る。

事務室が入っている建物のドアを開けると環さんの叫び声が聞こえた。

「人違い！！人違いだから！！放して！！」
放して？捕まえられているのか？

居ても立ってもいられず声がした事務室の方へ走る。先ほどまで座っていたはずのカウンターにはいない。もどかしくドアを開ければ、

環さんが保護した学生に押し倒されていた。

神の職務の関係上、穏やかな心持ちでいることを心がけていたが、跡形もなく消えた。

のんびりしているとか穏やかな性格とか評されることが多いが、元々火山の神、気性が荒いのを抑えるためにそう努めているだけだ。惚れた女が押し倒されているのを見て、わざわざ穏やかでいようなど思わん。

涙目になった環を見て、さらにその思いが増す。

とりあえず、剥がす。触るな。

走り寄って環を男の腕の中から助け出すと、背中側から蹴りを一発いれてうつぶせにして取り押さえた。本当はこんなものでは済ましたくないが、環が気になる。

「環!!大丈夫か!?!」

自分の後ろにいる環に声をかければ、大丈夫と返事があった。

声が震えている。本当に大丈夫だろうか。

しかし、まずはこれだ。動けなくしているこれをどうにかせねば。

「とりあえず、話を聞きましょう」

うめき声がうるさい。

環は、男を放してやれという。環がそう言うならと、逃げられないようにしながらも、放してやった。

すると、いきなり環に向かって男が土下座をして驚いた。

どうやら寝ぼけたらしい。

環はよいと言いが、自分は決して許しはしないので、顔と名前と学部を覚える。

環が押し出して男を事務室から出て行かせる。

その背中が、疲れ果てていまにも座り込みそうだ。

それでも、私の方に向き直る。顔を見てビクッとされるのは傷つく。そんなにひどい顔をしているのだろうか。

そのとき、電話が鳴った。
「で、でます」
なぜか宣言されて、電話を取られた。

電話の相手は、佐々木氏らしい。山が噴火したから、何事か気になったのだろう。

「…あとで報告したいことはありませんが、烏帽子様には何もありませんでした。ご本人に代わりましょうか」

彼の心配事を増やすのは本意ではない。直接、話しておこう。受話器をむしり取る。

「烏帽子です。はい。ええ。大丈夫です。すぐに治まります。心配させてしまい申し訳ありません」

がしゃり。乱暴に受話器が置かれた。

環がその音に再びびくつく。相手を怖がらせてどうする。どうしようもないな。落ち着け。

はああああ。ため息を吐いて気持ちを切り替える。そうすると、この少しの間にしたことが次々と浮かんでくる。

「ああ、やってしまった…」

冷静になればなるほど、自分の取り乱し様に落ち込む。

彼女を守ると言ったのに守れなかった。

どれだけ怖い思いをさせてしまったのだろう。自分の不甲斐なさにまた怒りがわくが、まず先に謝らなければ。

「申し訳ない。約束したのに、守れませんでした」

「さっきの？あれは驚いたけど、襲うというよりも彼女への愛情行為だったせいかな、そんなに怖い思いはしなかったよ。心配しなくて大丈夫」

予想外の返事に驚くが、強がっているそぶりはない。

「本当に？」

「本当」

それでも、信じられず確認するが、力強くうなずかれた。よかった。いや、よくはないが、よかった。

安心すれば、自分の職務のことを思い出す。

窓の外は、先ほどまでよい天気であったのに、今は曇天となっている。こちらの街を覆うような降灰が始まっている。ああ、いかにお山さんを噴火させずにいられるか挑戦していたのに。記録が止まってしまった。

落ち込んでいるのを感じ取った彼女が聞いてきた。

「まだなにかあるんですか？」

「ええ、自分の本業を忘れて山を噴火させてしまいました」

前に風邪をこじらせて肺炎になったときは、すごいことになった。それ以降、体調管理は怠らないようにしていたのに、これからは、環さんも対象だ。今回の件で彼女の存在がどれだけ大きいかわかってしまった。

「お山さんのこと？でも、噴火なんてよくしてるよね」

きよんとする環さんに、そう言えば、何の神が知っているのか気になった。

「まあよくしてはいるのですが、今回ののは一歩間違うと大変だった

んです。ウチはお山さんの神社です。私に何かあるとお山さんに異変が出るのです」

へえっと言わんばかりの顔をしている環さんを見て、確信する。あれだけウチに来ているのに知らないなど。少しひどいと思った。だから、思わず言ってしまった。

「環さん、ウチに来てても阿吽達を触ることに夢中で由来書とか読んでないでしょ。私にあまり興味がないですよ。こちらは好きな女の子が襲われてるのを見て、我を忘れるぐらいだったのに」

「少しでも意識してもらいたくて、環さんを見る。……あれ？今、好きって言ってしまった？

「興味がないわけでもないですよ？あんまり突っ込んでいいのかわからないので、聞かないようにしているというかなんというか」あの顔は、聞かなかったことにしようとしている顔だ。環さんは、顔にすぐ出るのだから、わかるのに。

思わず言ったことでも、自分の気持ちを聞かなかったことにされるのは我慢ならない。

自覚したのは昨日とはいえ、いい機会だからちゃんと伝えよう。

「環さん、私は……」

告白しようとするど、がちやりとドアが開いた。

「おはようございます」

時間はちょうど7時。当番交代が来た。

小話5

「……温泉が湧いたな」

「これどうすんだよ……」

「なあ、烏帽子様だけだよ。湧いた瞬間に、目を泳がせて、口笛吹きながらどっかいったよな」

「ああ、見てた。吹けてない口笛吹いてた」

「……………」

「「これ、烏帽子温泉だな」」

大学施設温泉。通称：烏帽子温泉。本人は知られていることを知らない。

事情を知らぬ人は、土地の字が烏帽子だからだと思っている。

「主様が転ぶところ、初めて見た」

「なんでもないうって仰っていたけど、なんかあるな」

「環さんのことじゃないの？」

遅まきな恋が来ました。

狍犬達はとつくに気がついていません。

「やはり環様と主様の間には何かあったに違いない」

「ねえ、おやつ入れてあるって言ってたよね？」

「主様も様子がおかしかったが、環様もあれほど悲しそうな顔をされて……」

「僕、主様におやつ入ったの開けてもらってくる」

「これ、阿」

「咩の分はとらないよ。いってきまーす」

7 恋 と 二 大団円 の 狛犬達

阿は、2匹にもらったものはちゃんと半分派。咩はどんときも主様が気になる派。

狛犬達からされたくない起こされ方番付

1 口の中に足を入れられる

1度、肉球でぶにぶにされながら起こされたいと希望したところ、勢いを間違えた 阿が

前足を突っ込み、起床。それ以降は、頼んだことがない。

2 鼻ベチャ

冬の寒い日に、なかなか起きてこない私を阿が起こそうとしたところ、冷え冷えの鼻先が頼に。

それ以来、なかなか起きないと2匹に最終手段としてやられる。

3 阿のぺろぺろ

滅多にないが、起きるまでの間、阿に顔を舐められると、猫舌の

ざりざりで皮膚が擦りむける。

地味に1日中痛い上に、会う人、会う人に心配され事情を説明する恥ずかしい目に遭う。

基本、一人で起きられるけれど、たまには寝坊することもある。

そんなとき、あの子達はやってくるのです…。

「最近、鍋が多いですね。ここ1週間ずっと鍋でしたけれど、どうかしたのですか？」

月：しゃぶしゃぶ、火：豆乳鍋、水：白菜ミルフィーユ鍋、木：シードカレー鍋、金：水炊き、土：あんこう鍋。そして、今日はチゲ鍋。指を折って数える烏帽子様を横目に、うつむく。

「…鍋したいって言えば、烏帽子様を気軽に誘えるじゃないですか」「え？」

「暗くなってきたから帰らなきゃと思うんですけど、まだ烏帽子様と一緒にいたいときに鍋に誘ってるって言うてるんです」

「……………う、嬉しいです。」

真っ赤になるなよ、言ったこっちも恥ずかしいよ。わざわざ鍋本買ったんだよ。

バカップル。

二 笑顔

下駄でカランコロンしながら、環さんのことを考えて帰ってきた。それだけなのに幸せな気持ちでいっぱいになる。浮かれながら石段をあがっても、今度は転ばなかった。

「ただいま」

「おかえりなさい」

いつもは重なつて聞こえる挨拶が1匹分少ない。

「阿？どうしたのですか？」

「……」

阿の様子がおかしい。

「主様、どこへ行かれていたのですか？阿が拗ねて大変ですよ。」
後半は、こっそり私にだけ聞こえるようにささやかれた。

その言葉通り、いつもは姿勢よくウチの門番をしている阿が、今は台座の上で丸まって尻尾は垂らしてだらしない格好をしている。

「…おやつ」

ぼそりと阿が呟く。

はて、おやつとな。何かあったかな？

「環様が来られたときに、差し入れて私達の分のおやつが入っておりまして、そのことです」

眸に、そこまで教えてもらい、合点がいく。

先ほど、阿に環さんがウチに来たと起こされたのだ。あのときはそのおやつをねだりに来たのだな。

「すまなかつたね。阿。どうしても、急がないといけなかつたのだよ。先ほど持ってきてもらったおやつと大学祭のお土産にジャーキーももらってあるからそれをあげよう」
阿が起こしてくれなければ、間に合わなかつたかもしれない。ご褒美にジャーキーもつけることにした。

「ああ、それとね。これからは、誰も通すなと言ったとしても、環さんだけは通していいからね」
門番達には伝えておかなければ。

今朝逃げた環さんのことをずっと考えていた。

いろいろ考えた末に、今まで考慮していなかつた神という問題を検討することにした。

相談に乗ってくれそうな経験者を探してみようとしたが、日本では心当たりがなく、ギリシヤの神様は…!?!と閃いても伝手がなく、二進も三進もいかずに、畳の上でゴロゴロと転がっていた。

いつの間にか、眠ってしまったっていたようだ。

ベチャッと濡れた何かが頬にぶつかった不快感で目が覚めた。

「主様、起きてください」

「阿?どうしたのですか?」

阿の鼻が頬に当たったようだ。阿はかわいいウチの門番だが、鼻ベチャはされたくない起こされ方のひとつだ。やめるように言っているのに、これをするとということはどうしても起きてほしかつたの

だな。

「環さんが来たのです。おや…」

何か言いかけていたが、環さんが来たという言葉で飛び起きる。

「いつですか？」

「さつきです。それより、おや…」

また言いかけていた言葉を見無視して、入り口にあった下駄を履いて駆け出した。

先ほどならまだ間に合っはず。

あまりの走りにくさに、なぜ下駄にしたのか後悔したけれど、中間地点の自動販売機のところまで夜空を見ている環さんを見つける。

「環！！」

待っていてほしくて名前を呼ぶ。

気づいてくれた！！

目をこすっている。泣いていたのかな。私の気持ちは迷惑だったのだろうか。

それでも、そこで待っていてくれた。

環さんは、私の姿を見ると笑いをこらえていた。そう、貴女には笑っていてほしい。

「下駄ですね」

「慌、てて、飛び、出して、きたから」

「鍵はかけてきた？」

「ウチには、優、秀な、門番が、いるから、大丈夫」

息を整えて、環さんを見つめる。

「環さん、話を聞いてほしいのだけれど、いいかな」
朝みたいに逃げられないように、肩を掴んでおこう。

環さんの返事は、はいだった。

今まで思っていたことを伝えようかと思っただが、先ほどの泣いていた様子がよぎって、ついつい自分の負の部分を書いてしまう。

「環さん、私は、神で人とは違います。貴女からしたら面妖な力も持っています。色々制約もあって遠くへは行けないですし、年はよく覚えてませんが、だいたい250歳のおじいちゃんでもありません。だから、貴女を楽しませることは出来ないかもしれませんが。今まで縁遠かったので、女心には疎いですし、実を言えばなぜ貴女が逃げてしまったのか分かっていません。それでも、私が神であっても、貴女が傍にいてくれたらと願ってしまいました。環さんが好きです。このまま一緒にいてくれませんか？」

泣かせてしまうかもしれませんが、貴女が好きなのです。

笑っていてほしいという気持ちとは矛盾するけれど、泣くのだから私の傍であってほしい。

どうか一緒にいてほしい。

拒否されてもしかたがないと思っただが、彼女は話し始めた。

「烏帽子様の穏やかな性格が好きです。にこにこ笑っている烏帽子様が好き。それと一緒に美味しいものを探したり食べたり作ったり、そんな時間を過ごすのも好き。私を送り出して迎え入れてくれる声が好き、笑ったときに目尻に出来る皺しわも大きくて暖かい手も、烏帽

子様の全部が好きです」

肩を掴んでいた手に環さんの手が重なる。彼女が何を言っているのか理解が追いつかない。

「正直、烏帽子様は私にとって神様という感じではないのです」

「今まで、友人だと思っていました。または弟のようなものだ。でも、おかしいんです。兄弟や友人なら、一緒にいてもドキドキしない。用事で会えなくても、あんなにがっかりしない。2度と会ってもらえないかもと思えば、胸が潰れるような気持ちになりました。朝は、逃げてしまつてごめんなさい。気づいたのはさっきですが、私は烏帽子様が好きです」

環さんは、私が、好き。……好き。今、追いついた。

爆発的な喜びが身体中からわいてくる。

やっと捕まえた!!

今朝みたいになくなってしまわない様に抱きしめる。

「本当ですか!? 本当に?」

信じられない。もしかしたら、まだ眠っていて自分に都合のよい夢の続きを見ているのかもしれない。

「本当。だけど、痛いから放して」

痛いと聞いて、身体をはなす。夢の中の環さんにだって、痛い思いはさせたくない。

しかし、消えてしまうかもしれない。…肩は掴んだままにしておこう。

結局、肩から伝わってくる体温で夢じゃないとわかるまでそのままだった。

今日は、環さんには驚かされっぱなしでした。最後だって。

環さんからくしゃみが聞こえた。

「このままここに居るわけにも行きませんね。送っていきますよ」
寒い中、彼女をずっと立たせたままにしているのに気づいた。暖かくしなければ、風邪を引いてしまう。

2、3歩進むが、環さんはついてこない。不思議に思って振り返る。環さんが、うつむいたまま無言で手を差し出してきた。

これは、きつとこれからよろしくの意味を込めた握手をしようというのだな。

重ねる右手。景気よく、上下に振る。

すると、違ったらしく不満そうな声が出た。

「…握手じゃない。左手、出して」
握手じゃないなら、何をするつもりなのだろう。環さんがしたいようにさせてみよう。

「ごめんなさい。はい、目的の左手です」

左手を差し出すと、環さんの右手が重なってきた。そして、そのまま横に並ばれた。

ついでに、指と指が絡まって…。これは！…これは、学生達がしている、恋人つなぎ！！

「さあ、行きましょ」

わざとつないだ手を目の位置まであげられた。

こいびと。

その響きと、今、初めてまともに彼女に触れたことに気づいて赤くなる。

捕まえたと思ったけれど、本当は捕まえられた。

でも、どちらでも構わない。

これからは、彼女の横にいられるのだ。

環さんの家はもう見えているけれど、嬉しくて離れたくなくてゆっくり歩く。

「烏帽子様、ご飯食べました？」

「今日は、ずっと環さんのことを考えていたから、食べていませんよ。ねえ、環さん」

今日はちっともお腹が減らなかった。今もそんなに気にならない。それより、顔を赤くさせた環さんがこちらを見てくれないことになる。

「なんですか？」

「ねえ、なぜ、ずっと左側を見ているんですか？」

どんな顔でも見ていたい。覗き込もうとしたら、さっと環さんの手が顎を押さえた。

がちんって音が…。少し鉄の味がする。

「なんでもない。今日の献立は秋の味覚がテーマです。食べてく？」

「ええ、もひろん」

まだこちらを見てくれない環さんから夕飯のお誘いが来た。
環さんのご飯と考えたら、お腹が急に空きだした。手で押さえられ
たまま返事をしたら、環さんは吹き出した。

…なんだか本当に驚かされっぱなしですね。

なにかこちらもしてみたいです。何かないでしょうか。
辺りを探せば、ふと小箱が目に入った。

あの中には…。

ふふ、あれにしましょう。晴れて、こ、恋人になれたのですから許
してくれるでしょう。

明日の朝に驚かせてみましょう。

「おはようございます」

「おはようございます」

環さんと阿・吽の声が聞こえる。

いつもの朝の風景。

「おはようございます」

「あ、烏帽子様おはようございます」

にっこり笑う環さんがかわいらしい。

「何かありましたか？」

「いいえ、昨夜の神社も何もありませんでしたよ」

毎朝の確認事項。彼女は既に1回、神社周りを見てくれて、最後に

私に聞いてくれる。

「そうですか。それはよかったです。それでは」

仕事だから仕方がないが、なんでもないような顔をしている環さんに悔しさを感じて、やはり昨日見つけておいたネタを披露しようと石段の下まで、見送りに出る。

「いつもは、鳥居のところで狛犬達と一緒に見送ってくれるのに珍しいね」

あの子達の前ではさすがに恥ずかしいので。

「なんでもないですよ。お仕事頑張ってくださいね、みどりさん」

みどりさんが一気に顔を赤くした。

成功！！

みどりさんは口をパクパクさせている。

大成功！！

「ど、どうして、それを。どこで？主任！？」

「いいえ。これです」

みどりさんから貰った名刺を差し出す。

そこには、大学事務課 環 みどり と書かれている。

初めて貰った特別な名刺。

「やめてえ。頑張つて顔に出さないようにしてたのに、名前なんて呼ばれたら、恥ずかしくて死ねるっ」

頭を抱えてしゃがみこむみどりさん。そんなに大変なものだったのか。

「あつ、呼び返そうと思ったけど、烏帽子様の下の名前知らない」「教えません」

みどりさんの反応を見れば、自分が下の名前を呼ばれば、この比

ではないだろう。
それでは、仕返しにならない。

「由来書、見てくる!!」
降りた石段を登ろうとするけれど、止めない。

「どうぞ」
しばらくすれば

「この由来書、錆びていて読めないじゃない!!」
と叫ぶ声が聞こえた。

「ついでに、烏帽子もウチの神社の名前であって、私の苗字ですらないですよー」
叫び返しておいた。

本名は、舌を噛みそうな名前なので、烏帽子神社の神様、通称烏帽子で通しているのだ。

通称にしてから、みんなが話しかけてきてくれるようになって嬉しかった。

驚愕の事実を知ったらしいみどりさんに詰め寄られ教えただけで、やはり何度も噛むので、諦めて烏帽子呼びで通すようにしたようだ。私もみどりさん呼びをやめるように言われたので、照れて恥ずかしかる彼女を見られなくなるのは残念だったが、ここぞというときに控えることにした。

「ほら、遅刻してしまいますよ」

「遅刻しますよじゃない。ああ、なんで今まで黙ってたのよ。もう。また夕方来るから、そのときにじっくり聞かせてもらおうからね」
そう言ってみどり、いや環さんはかけていく。

いつもと変わらない朝、ただ彼女と自分の関係が変わった。

そのことが嬉しくて笑顔で見送る。

「いつてらっしゃい、環さん」

「いつてきます」

振り向いた彼女は、いつもの私を幸せにしてくれる笑みを浮かべていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2583y/>

神様と事務員

2011年11月16日21時29分発行